

# 伊豆利彦における2つの「戦後」、概念としての《他者》へ

——「事実」と「真実」、「観念」と「肉体」の足踏み、「ああ言えばこう言う」を超えていくために——

須貝千里

キィ・ワード：「ああ言えばこう言う」 「事実」と「真実」 「観念」と「肉体」 2つの「戦後」 「天皇制」と2つの「外部」 「自己化」  
概念としての《他者》 3つ目の「しかし」

伊豆利彦さんがお亡くなりになりました。91歳でした。2017年12月8日のことです。76年前の、1941（昭和16）年12月8日は日米開戦の日でした。その日に始まった、長く続いていた戦争の最終段階（大東亜戦争）への突入は、伊豆さんの生涯にとって決定的な意味をもった出来事でした。与えられた状況の中で、いつ死ぬか（殺されるか殺すか）分からないという事態に直面させられたからです。期せずして、生き延び、76年後の同じ日に、氏は自らの生涯を閉じられました。「戦後の精神」？とともに生き続けて、です。穏やかな最期であった、と聞いています。

私の鼓動が停った時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です」と書き記しました。『こゝろ』の「私」が、亡くなった「先生」についての手記を書くことによって、「明治の精神」に向き合っていたように、わたくしは「戦後の精神」に向き合っていくことになります。伊豆さんの言い分と読者の批判を前提にして、です。

ということで、『こゝろ』の「先生」と伊豆さんの、それぞれの生と死は大きく異なると同時に、何かが近接しています。何か。「先生」のことを掘り起こしつつ、そのことはここに書き記すことは殆どないのですが、伊豆利彦とは何者であったのかの探究のために、本稿を書き進めていきます。このことは、わが心の彼方、識閥下の小部屋の1つを開けてみることになるでしょう。いくつかの課題と向き合いながら、です。

これは、わたくしの伊豆利彦さんに対する追悼の文章です。平成の時代が終わりに近づく中で、書き記していきます。伊豆さんの元から歩み出し、ほとんどお会いすることがなかった、この24、5年を振り返りつつ、です。わたくしの場所を語ることになるでしょう。」

## I. 探究の全景と根拠としての〈第三項〉

唐突に思われるでしょうが、柩の蓋を開けてみようと思います。時空的レベルに埋葬されている柩の蓋を次元的レベルで開けていくことになるでしょう。このことは誰にも頼まれていないのですが、いや、これは伊豆さんの願いに応えることなのかもしれません。漱石の『こゝろ』のように、です。自殺した「先生」の、「遺書」を「妻」に見せないでほしいという願いを裏切り、自らの手記に引用し、公開してしまった、かつて学生の時代に「先生」と出会った「私」のように、です。おそらくお前にそんなことをする資格があるのかと「私」が自問自答しながら手記を書き進めていったように、わたくしもそうした自問自答とともに、この文章を書き進めていくことになります。

次元的レベルで、とは、蘇りに向けての行為です。埋葬し直すための行為でもあります。「先生」は、「遺書」の中に「私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴びせかけようとしているのです。

### 1. 探究の課題の提示

前後してしまいましたが、いくつかの課題を、まず提示しておきましょう。

1つ目は、実体主義批判と「ああ言えばこう言う」をめぐる課題、2つ目は、伊豆さんに大きな影響を与えた先人、丸山静と猪野謙二のそれぞれの近代文学研究のスタンスと伊豆さんのスタンスをめぐる課題、3つ目は、北村透谷と島崎藤村に対する受け止め方の問題と2つの「戦後」をめぐる課題、4つ目は、「作者」、「作家」、「語り手」の一体化をめぐる課題、5つ目は

「天皇制」批判における「外部」と「内部」をめぐる課題、6つ目は、文学作品の教材価値と「国語科」をめぐる課題、7つ目は、市民運動、平和運動をめぐる課題、8つ目は、「ヴェトナムの光」というエッセイが「上」だけ発表されて、「下」が発表されずに未完であったことをめぐる課題などです。

こうした探究の課題は、伊豆利彦さんにおける2つの「戦後」問題を問い、「ポストモダン」をめぐる〈80年代問題〉を掘り起こしていくことに向かっていきます。田中実さんが提起する〈第三項〉論、〈近代小説〉と〈近代の物語文学〉の違いの問題に正対していくことになります。(1)「日文協」とは何かという課題も切り拓いていくことになります。それだけではありません。文学研究と国語教育(実践と研究)の課題も切り拓いていくことになります。そのことによって、ポスト・ポストモダンの時代が拓かれていきます。

これらの探究の課題は、探究の前提ではありません。どこに向かっていくのか分からない伊豆利彦探究が向かっていった先を、問題提起として事前に提示しているに過ぎません(まずは、本稿の読者とともに掘り起こしの過程を共有していきたい、と願っています。したがって、このようなことは、ここで提示しない方がいいのかもしれませんが、わたくしの文章力のなさが、こうした逆立ちした書き方を強いているのです。いつの日か、未来を提示しない文章を書けるようになりたいものです。誰も的人生がそうであるように、です。これは、わたくしにとっての「客観描写」の夢です)。

## 2. 「研究」と「叙述」の根拠／方法

「探究」というアルケオロジーは伊豆利彦の識関下に向かっていきます。伊豆利彦の「戦後」を問い、時空的レベルの検討が次元レベルの検討に転換していきます。すると、伊豆利彦をパラレルワールドという事態の中に置き放っていくことになります。意識、無意識の掘り起こしが識関下の掘り起こしに突き抜けていくことになります。その境目は自明なものではありません。

歴史研究は研究の根拠を研究の対象にしていくこととともに進められていきます。歴史叙述は叙述の根拠を叙述の対象にしていくこととともに進められていきます。「研究」と「叙述」はそれを取り扱っている《客体そのもの》の〈影〉の現れです。「根拠」は

客観主義(実体主義・自然主義)によって担保されていません。《客体そのもの》は到達不可能な、了解不能の《他者》だからです。

では、「根拠」は何によって担保されているのでしょうか。《客体そのもの》の〈影〉によって担保されています。《客体そのもの》は、認識論の対象ではありません。實在論の対象です。存在しているのですが、認識できないのです。このことは、〈近代小説〉と〈近代の物語文学〉の違いの探究と軌を一にしています。視点人物と対象人物をめぐる問題になっています。

《語り手を超えるもの》＝《機能としての語り手》の問題になっていきます。「客観描写」の困難さをめぐる問題です。

〈第三項〉論はこうした問題を探究していきます。

本稿における「アルケオロジー」は、通常の実体主義を前提にした考古学のことでありません。フーコーのそうした考古学の実体主義に対する批判を前提にした、記録の集積の中から多声的な声を聞き取り、中心化を排し続けようとする「知の考古学」のことでもありません。前者はモダンの客観主義(実体主義・自然主義)であり、後者はポストモダンのアンチ客観主義(アンチ実体主義・アンチ自然主義)です。ともにエセポストモダン＝エセ価値相対主義という事態にさらされています。〈第三項〉論は、エセポストモダン＝エセ価値相対主義に止まることなく、この事態はモダンとポストモダンの癒着ということになります。両者を乗り越えようとする提起です。〈第三項〉論に立脚する「アルケオロジー」は「新しいアルケオロジー」と言うべきものです。モダンの客観主義(実体主義・自然主義)の虚偽性が掘り起こしの対象となり、その事態を問うことになります。時空的レベルではなく、次元レベルが掘り起こしの対象とされます。このことはパラレルワールドという事態に向き合い、〈近代小説〉と〈近代の物語文学〉の違いという各論の探究とともになされていきます。そのことによって、ポストモダンを、エセポストモダン＝エセ価値相対主義に止めるのではなく、ポスト・ポストモダンの時代に転換していくことになります。このことは、モダンとしての「容認可能な複数性」に止まることなく、ポストモダンとしての「還元不可能な複数性」に正対し、両者を癒着させたエセポストモダン＝エセ価値相対主義に陥ることなく、ポスト・ポストモダン

の時代を拓いていく〈第三項〉論に向き合っていくことになります。

《伊豆利彦》問題に焦点化するならば、こうなります。そのための掘り起こしの過程は、到達不可能な、了解不能の《他者》としての《伊豆利彦そのもの》の〈影〉と対話し、〈わたしのなかの伊豆利彦〉を刻んでいくこととしてなされていく、と。このことは、次元的レベルの《伊豆利彦そのもの》の〈影〉という、客体の識閥下を掘り起こすこと、伊豆さんが考えていないことを掘り起こすことができるのか、どうか、そしてその説得力に関わっていきます。〈主体〉の側の識閥下を掘り起こすことに反転していきます。〈主体〉の側の自己倒壊が必須です。もちちん、このこと自体が批評の対象にされ続けていきます。動的過程の中にあるからです。

この過程は〈客体〉の側の掘り起こしによる〈主体〉の側の対象化の過程です。このことは、到達不可能な、了解不能の《他者》に対する〈第三項〉論の立場からの実践です。《客体そのもの》としての《他者》、《伊豆利彦そのもの》は存在しています。しかし、それは〈主体〉の側からは永遠にたどり着くことはできません。当たり前のことですが、〈わたしのなかの他者〉としての〈伊豆利彦〉は、《客体そのもの》としての《他者》、《伊豆利彦そのもの》ではないからです。これが〈第三項〉論による説明の仕方です。

どういうことでしょうか。

### 3. 「意味の場」としての存在論に注目して

《伊豆利彦》と〈わたくし〉は、「新しい實在」論を提起するマルクス・ガブリエルの言によるならば、「意味の場」(2)を異にしています。このことは、時空的レベルの問題を次元的レベルの問題に転換していきます。この事態が「世界」が「存在」しないという事態です。

こういうことです。

《客体そのもの》としての《他者》と〈わたしのなかの他者〉は「意味の場」が異なっている、と。したがって、〈わたしのなかの他者〉から《客体そのもの》にたどり着くことはできません。《客体そのもの》としての《他者》と〈わたしのなかの他者〉はそれぞれ

「存在」しているのですが、《客体そのもの》としての《他者》と〈わたしのなかの他者〉は、「意味の場」が違う、次元を異にしているにもかかわらず、両者を同一の時空で考えてしまう認識論によって混迷させられてしまっています。しかし、存在論のレベルにおける《客体そのもの》としての《他者》という「意味の場」を問題にすることを、認識論は排除することができません。それどころか、認識論は存在論によって脅かし続けられています。この存在論は実体論ではありません。存在論は「意味の場」の成立のことなのですから。したがって、認識論と存在論の交点に浮かび上がってくるのが、次元的レベルという事態です。パラレルワールドという事態です。この事態は〈近代小説〉に向かっていきます。時空的レベルという事態においては、そうした交点が課題にされることはありません。この事態は〈近代の物語文学〉に向かっていきます。ガブリエルの「新しい實在」論は、わたくしたちにこうした視界を拓いていきます。

このことは、《客体そのもの》に〈わたしのなかの他者〉がなることではありません。それが可能だとすると、エセポストモダン＝エセ価値相対主義ということになってしまいます。今日、こうした事態は〈神〉と〈神〉との抗争の時代、「ポスト真実」の時代を生み出していきます。問題はまき散らかされています。なぜか。時空的レベルに脱出口はないから。次元的レベルに用意されているから。しかしこのようには考えられていないからです。

〈第三項〉論では、「新しい實在」論を《客体そのもの》としての《他者》の〈影〉の問題として提起しています。そのことによって、〈近代小説〉と〈近代の物語文学〉の違い、対象人物から視点人物を捉え直していくことや〈語り手を超越するもの〉＝〈機能としての語り手〉の問題、「客観描写」の困難さをめぐる問題を探究しようとしています。

すると、こうなります。

《客体そのもの》としての《伊豆利彦そのもの》によって、〈わたしのなかの他者〉としての〈伊豆利彦〉が、次元的レベルで問われていく、と。それゆえに、わたくしたちは課題に直面します。《客体そのもの》としての《伊豆利彦そのもの》の〈影〉と対話し、〈わ

たしのなかの他者」としての〈伊豆利彦〉を壊し続け、刻み続けていく、という。〈わたしのなかの他者〉としての〈伊豆利彦〉は、わたくしの自己倒壊の過程の中に生起し続けます。伊豆利彦さんをパラレルワールドという事態の中に解き放っていきます。これが、「歴史研究は研究の根拠を研究の対象にしていくこととともに進められていきます。歴史叙述は叙述の根拠を叙述の対象にしていくこととともに進められていきます」ということです。もちろんわたくしは《伊豆利彦そのもの》にたどり着くことはできません。

「歴史研究」を「研究」の対象にすることと「歴史叙述」を「叙述」の対象にすることとは、次元的レベルで《客体そのもの》の〈影〉を問い続けていくことに他なりません。時空的レベルを次元的レベルによって問題化していくことが「研究」と「叙述」の根拠をめぐって問われているのです。

あえて本稿における探究のベクトルの全景と根拠を、最初に開示しておきます。

## II. 伊豆利彦における「戦後の精神」

伊豆さんは、1926年11月10日に福岡県直方市に生まれました。ご家族で上京され、開成中学校、武蔵高等学校（祖父江昭二さんは武蔵の後輩）と進み、18歳の時、疎開先の郷里、福岡の某地で、1945年7月20日に甲府の連隊に入隊せよとの電報を受け取りました。二等兵としての入隊でした。電報を受け取ったのが20日でしたから、実際の入隊は、その何日か後です（「特別甲種幹部候補生試験」は書類選考で落とされたそうです。ご本人は、高校の軍事教練に心身不調のゆえに出なかったからか、とおっしゃっていました。同じ理由で勤労動員も休み、上野の図書館に入り浸り、高下駄で通っていたので、よく注意されたとのこと）。入隊後は、甲府湯村の地での三角兵舎造りにあたります。1か月弱で敗戦となり、復員します。その後、1947年4月、東京大学に入学、最初のうちはあまり大学に通わず、千葉県の八街で共産党の地域活動をしていたそうです。1年ぐらいて大学に通い出し、1年後輩の草部典一さんと親しく付き合うようになったようですが、また早稲田大学の学生だった紅野敏郎さんとも知り合いになったようですが、依然として

あまり大学には通わず、1年後輩の益田勝実さん、同学年の難波喜造さん、杉山康彦さんなどとは親しく付き合うこともなく、1950年9月に旧制の大学を卒業します。最後の繰り上げ卒業だったそうです。三好行雄さんは同学年でした（わたくしは1950年9月4日に生まれました）。

少し時を戻しますが、在学中に日本文学協会の東京大学支部が1949年6月17日に設立されました。その前後に協会には加わっていることは確かなのですが、伊豆さんが設立の会に参加したか、どうか、は不明です。入会は草部さんに協会を紹介されたことによるとのこと（なお、日本文学協会の設立は1946年6月15日です。会長藤村作、理事佐藤幹二・永積安明・守随憲治・近藤忠義・本田顕彰という執行部体制でした。1950年5月27日の第5回総会で中央委員長に近藤忠義が選出され、綱領・会則が採択されています。事務所は、設立当時は、東京の世田谷区の烏山の藤村宅だったそうです。1948年6月からは神田の岩波書店小売部の2階、1951年4月からは神田神保町の煎餅屋の2階で、ともに歴史学研究会との相部屋、その数年後、現在の豊島区南大塚の地に移ってきて、協会だけの事務所を開設しました。紅野敏郎さんの紹介だったそうです。大家の石山さんが紅野さんの知り合いだったという縁です）。伊豆さんは東京大学の国文研究室的の紹介で、11月に新制の埼玉県立浦和西高等学校の教員となったそうです（伊豆さんは、すでに結婚されていました。お子さんもいらっしゃいました。ご長男はわたくしと同年です）。

伊豆さんは、新卒の高校教師でありながら、1952年に「文学教育の任務と方法」という、今では大げさなと言われかねないタイトルの論文（2）を発表しました。「文学教育は体験を通して自分のものとしている現実認識——生徒の世界と文学の世界とを結合することであるといってもいいすぎでない」と提起しています。これは藤村の詩を教材にした実践報告でした。氏は、その2年前には日本文学協会の総会か、大会か、で藤村に関わる報告しています。今では考えられないような時代です。ご本人の記憶によると、協会の「綱領」の素案も伊豆さんの執筆だったようです。1953年4月からは横浜市立大学文理学部の専任として日本近代文学を講じました（朝鮮戦争の時代です。サンフ

ランシスコ講和条約の締結前後の時代です。日本の再軍備が占領軍及び政権党の課題として登場し、レッド・パージの時代、分裂していた社会党が再統一したり、自由民主党が保守合同によって誕生したりした直前の時代、宮本顕治らが排除され、共産党が分裂していた時代、公務員の給料が財政難で月2回に分けて支給されていた時代です。島崎藤村の詩の研究から出発した伊豆さんは、その後、夏目漱石、小林多喜二などを中心にした日本近代文学研究に向かい、国語教育についても発言を続けていきました。60年安保、70年安保の時代を経て（平和と民主主義を守り、いや、創造するために戦い続けて）、1980年代、90年代になると、伊豆さんは、日本学術会議会員に選出され、日本文学協会の委員長もされました。「市民の市長をつくる会」の推薦で横浜市長選に立候補したこともあります。晩年になるほど、時代は伊豆さんを裏切り、息苦しいものになっていきましたが、論文の執筆、市民運動、平和運動への参加に止まらず、ホームページを開設し、日々の思いを発信し続けました。戦い続けていったのです。

伊豆さんの研究は、市民運動、平和運動とともに歩まれ、その中で紡ぎ出されていったものです。生きていくこと自体の価値を前提にして、です。これは、伊豆さんの「戦後の精神」の現れ、生きていくことの喜びに基づく原理です。このことは生涯変わることはありませんでした。まさに「戦後」の文学研究者です。「戦後」の歩みとともに生きた「国民」の1人でした。

本稿は、伊豆利彦さんを蘇らせていくために書き進めていきます。《伊豆利彦そのもの》という、その識閥下を掘り起こしていこうとしています。そのために、ただただ伊豆さんの残された言葉に向き合っていきます。《伊豆利彦そのもの》の〈影〉との対話によって、〈わたしのなかの伊豆利彦〉を壊し続け、刻み続けていきます。

### Ⅲ. 伊豆利彦さんとわたくし、「ああ言えばこう言う」との出会い

#### 1. 伊豆利彦さんとわたくし

伊豆さんとわたくしの出会いは、日本文学協会での出会いの前、氏が主宰の「みんなで国語の教科書を読

む会」において、です。この会は、1970年から1992年にかけて展開された教師と父母による市民運動です。家永教科書裁判の第1審判決で「国民的教育権」が認められたことに、自発的に呼応して取り組まれたものです。教師と父母が国語教科書と児童や生徒の感想文を読み合い、教育の問題を考えるという取り組みで、月に1回、例会を開催し、機関誌は32号まで出しました。タイプ印刷の月報も出しています。この会は、伊豆さんが、判決の意義は市民の運動によって、さらに意味のあるものになるというように考え、郷静子さんとも計らって、いくつかの文学読書会の父母たちとともに立ち上げたものとのこと。これは、伊豆さんの、「戦後の精神」＝「生きていることの価値を前提にして」の実践の1つです。

わたくしは、職場の先輩であり、日本文学協会国語教育部会の先輩でもある石垣義昭さんに誘われて、会に参加するようになりました（石垣さんは、わたくしの中学校2年生の時の国語の先生です。その時、氏は新任でした。こののち、母校である武蔵工業大学付属中学校・高等学校の教員になったわたくしの教員生活、学校づくりの運動と組合活動にも深く関わってくる方ですが、その物語は機会があれば、別の機会で述べることにしましょう）。埼玉県の中学校の五十嵐清美さん、和光高校の松本議生さんも参加していました。会に参加したのは、1974年か、75年か、のことです。わたくしの24、5歳頃のこと。その頃、わたくしはまだ母校の非常勤教員で、横浜の埋蔵文化財、弥生時代の環濠集落と方形周溝墓群がセットになっている「あづま山・歳勝土遺跡」の保存運動に取り組んでいました。横浜市が飛鳥田市政の時代でした。遺跡の発掘には中学生の頃から参加していましたが、保存運動が一段落したので、運動から足をあらい（運動の成果で、遺跡の一部が保存され、その地に横浜市立の歴史博物館が建てられました）、わたくしは母校の専任教員になり、国語教師の仕事に集中するようになりました。26、7歳になっており、わたくしは結婚していました。その後、1989年9月に奈良教育大学の教員になりましたが、1992年に会が終わるまで、ここで国語教育についての勉強を続けていました。大学で益田勝美先生の「国語科教育法」を受けてはいたのですが、「第1次感想文」という言葉すら知りませんでした。益田先生にも大事なことを学びましたが、人に恥ずかしくて聞

けないようなことを、伊豆さんの会の先輩の先生方から教わりました。今思えば、同じような年齢の参加教員たちも同様だったのでしょう。切羽詰まった事態の中で多くを学びました。そして、会の終了後、続けられていった一部の教員による研究会が閉じられるまで、月に1回の例会に参加し続けました。40代の半ばまで、です。このようにして、わたくしは国語教育研究を自らの仕事にするようになりました。

それから、さらに24、5年経ち、伊豆さんの死の知らせを受けました。2018年12月の末のことです。会で一緒にいたOさんから電話がありました。わたくしは心臓のステント治療のために入院中でしたが、病室の廊下で電話を受け、伊豆さんが亡くなったことを知り、偲ぶ会があることを知りました。この電話で、偲ぶ会の実行委員を頼まれ、引き受けました。「伊豆利彦先生を偲ぶ会」は、年が明けて3月25日に横浜中華街の菜香新館で開かれました。暖かな日でした。50名ほどの参加でした。顔見知りの人もいましたが、ほとんどが初対面の人でした。

## 2. 「ああ言えばこう言う」、Oさんの夫の記憶

時間が前後しますが、1月18日、わたくしは、横浜駅近くの県民センターで開かれた実行委員会に参加し、終了後、OさんとMさんとで、居酒屋で小一時間の時を過ごしました。OさんもMさんも市大の卒業生です。Mさんとは初対面、Oさんとは24、5年ぶりの再会でした。Oさんは伊豆さんが亡くなる数か月前までいっしょに「漱石を読む会」をやっていたそうです。ホスピスにまで行って、話を聞いていたとのこと。

何かの弾みで、Oさんは「うちの夫には、先生は評判が悪いのよ。先生が学長代行をやっていた時があったでしょ。1か月かそこらなんだけど、機動隊が導入されて、学生によるバリケード封鎖が解除された後、全学集会が開かれたの。その時の先生の話が、ああ言えばこう言うで、何を言っているのかわからないって、当時の夫の仲間たちが集まると、今でも言っているわよ」という話をされました。今は退職し、老人会のカラオケ部長を務めているそうですが、Oさんの夫も市大の卒業生です。

Oさんの話は、伊豆さんが1969年5月27日から6月19日まで「学長職務代理」をされていた時のこ

とです。ここで浮上した「ああ言えばこう言う」には小賢しいというニュアンスはありません。それとは別、伊豆さんの言葉は何言ってたんだ、「しかし」で展開し、分かり難いな、イエスなのノーなの？こんな感じ。すぐに言葉にブレーキがかかってしまうが、言葉が止まらない。少なくとも知的な、明晰な言葉ではない。温かいけど、取り付き難いって、感じかな（これはわたくしの解説）。

## 3. 伊豆さんの言葉の森で、自らの足どりを確認して

伊豆さんは、多くの本を残されました。

単著としては、

『有島武郎』（福村書店 1952年3月）

『日本近代文学研究』（新日本出版社 1979年2月）

『戦時下に生きる——第2次世界大戦と横浜』（有隣堂書店 1980年5月）

『漱石と天皇制』（有精堂 1989年9月）

『夏目漱石』（新日本出版社 1990年4月）

『戦争と文学 いま、小林多喜二を読む』（本の泉社 2005年7月）

編著としては、

『横浜の戦災と空襲 第2巻 市民生活篇』（有隣堂書店 1975年12月）

『国語科がつまらない 文学と教育の広場を』（合同出版 1978年8月）

などです。

とりあえずこう並べてみましたが、これだけでは何も分からないでしょう。伊豆さんの言葉の森に彷徨ってみるしかありません。ただ繰り返し読むだけです。どのようなことかと問うことで立ち止まり、なぜかと問うことでまた立ち止まる。行きつ戻りつしていると、何度も何度も会ったこともないOさんの夫の「ああ言えばこう言う」という評言に覚醒されて、思いもよらない地平が拓かれていきます。呪文のように、です。こういうことだったのか、と自らの足どりを確認しながら進んでいきました。

## IV. 「事実」と「真実」をめぐる袋小路、「作者」、「作家」、「語り手」の一体化

伊豆さんは60年安保の翌年、日本文学協会の文

学研究の部の大会で、「思想」の実体化からの決別という問題を提起しました。(4)法政大学での開催でした。

この提起は、日本文学協会の学統ということに焦点化するならば、歴史社会学的方法の克服について論じたものであるということになるでしょう。1960年代の益田勝実さんの歴史社会学的方法から歴史社会学の立場への転換という提起に呼応する提起になっていた、と言っていいでしょう。(5)この転換は、益田さんの1960年代の仕事にとっては決定的に大事なことでした。伊豆さんの報告が文学研究の部でなされた時、国語教育の部では、その益田さんの「一つの試み——十年目の報告——」という報告がなされていました。50年代の自らの研究と教育のあり方の総括として、です。益田さんの報告は、「歴史社会学的方法から歴史社会学の立場への転換」という課題に向かっていくもので、そのことを国語教育の課題として先駆的に提起するものでした。この報告は伊豆さんの報告と同じ号の『日本文学』に掲載されています(益田問題に関しては未発表であります、拙稿「益田勝実の〈転向〉と地団駄を受け止め直し、〈第三項〉と向き合って——戦後・国語科・教育の転換、焦点としての『こころ』(夏目漱石)の学習課題の転換——」で論じています。益田さんをめぐる拙稿の内容は、本年4月30日の西安交通大学の研究会で口頭報告したものです。近日中に発表する予定です)。益田さんの、この転換はのちに1970年代になって、自身によって〈転向〉の問題＝「方法複合の陥穽」、「制動器なしの学問」の問題として、さらに自覚的に問題化されていくことになりましたが、伊豆さんにおいては、1961年の大会報告によって切り拓かれていった地平を、さらに自覚的に〈転向〉として問うことにすすんでいくことはありませんでした。伊豆さんは、モダンとしての構造主義(容認可能な複数性)からポストモダンとしてのポスト構造主義(還元不可能な複数性)へという研究状況の推移には無縁に過ごされていたからです。「戦後の精神」＝生きていることの価値を生き続けていったのです。このことが自らの〈自他未分の意識構造〉によって育まれ、「ああ言えばこう言う」が生み出され、エセポストモダン＝エセ価値相対主義に迎合していくことになってしまっていたのです。「迎合」というのは、伊豆さんの場合、ポストモダン問題に直面してそのようにな

ったのではないから、ということに関わっての言いです。そして、〈自他未分の意識構造〉の問題は、伊豆さんの「天皇制」論議の問題の核心になっていきます(このことは本稿のⅥの1, 2, 3で論じていくことになります)。

論が少し早く展開し過ぎていますね。「迎合」？ということに立ち止まって、論じ直していきましょう。

### 1. 「思想」の実体化からの決別の提起と「事実」と「真実」をめぐる袋小路

伊豆さんの報告は「思想をある実体のようなものとする考え方が私たちの間にあって、それが教条主義ともいえるべき非創造的なものに思想をしているのですが、非創造的な思想は現実に対して有効であることが出来ず、このことが明治以来幾度となくくりかえされて来た転向を生み出してきたのではないかと考えるのです」と語り出されています。これは、戦後革命運動に対する、個人的な総括ということもできるものです。伊豆さんからお聞きしたことによりますと、氏は当時日本共産党の党員で市大細胞に属していたそうですが、細胞に対する上級機関からの連絡が一方的に切られてしまって、遠山茂樹、西郷信綱らとともに党から追放される形になってしまったとのこと。それ以上は聞いておりませんが、こちらから辞めるつもりはなかったということのようです。査問を受けたわけでもない。指導部の言うことを聞かないので、市大細胞自体が市委員会、県委員会に嫌われていたのだろう、と言っていました。伊豆さんは理論闘争というのが嫌いだ、とも言っていました。党員の再登録が上からされていたのでしょうか。選別です。これは、日本共産党の「六全協」後の、第7回党大会、第8回党大会にかけての、宮本顕治らの党の掌握と再建の取り組みの中で起こっていた出来事の1つだったのでしょう。60年代初めの、野間宏、佐多稲子、中野重治らの党員文学者の動向(「部分的核実験停止条約」問題)との関連、あるいは「思想の科学」の共同研究で鶴見俊輔らと「転向」研究を進めていた藤田省三らの動向との関連は分かりません。当時は存在していたと思われる日本文学協会内の党員グループ(Hさんが日本共産党の都委員会の勤務員で、協会内グループと



の連絡係をしていたとの話を聞いたことがあります。メンバーは定かではありません)との関連も分かりません。このことはお話になりませんでした。

日本文学協会と歴史学研究会内の党員グループの動向については、「国民文学」論争と「国民的歴史学」運動に関わって、日本共産党の「戦後の文化政策をめぐる党指導上の問題について——文化分野での「50年問題」の総括——」(6)及び同党の路線をめぐる「50年問題」の資料集や総括文書に批判的な記述があり、何人かの方が実名、あるいは実名が分かる形で登場していますが、伊豆さんは登場していません(宮本顕治の「批判者の批判」で、宮本百合子について伊豆さんが書いた文章の批判があるそうです。名前の「利彦」が「公彦」に間違われていたとのこと。おそらく宮本は「伊豆公夫」(赤木健介)と「伊豆利彦」を間違ったのでしょう)。「戦後の文化政策をめぐる党指導上の問題について」には、「1950年前後の歴史学研究会や民主主義科学者協会の歴史部会の「一部党員歴史家」の「ヤマトタケルを日本古代の『英雄時代』の『民族的な英雄』である」としたり、「中世の一部の封建的芸術を『革命的階級の革命芸術』である」と評価したことを「民族主義的傾向への傾斜」であったと問題にした上で、「これとならんで文学分野でも日本文学協会や『人民文学』などの人びとによって、独特の『国民文学論』『国民芸術論』が展開されるにいたった。(中略)そこにははじめから民族主義的色彩がまっわりついていた」との指摘があります。この評価の是非については保留しますが、日本文学協会の「綱領」に、当時の共産党の「民主民族戦線」(1946年の第6回党大会で決定された「行動綱領」に基づき、その後提起された方針)や「民族解放民主主義革命」(いわゆる「51年綱領」によって提起された方針)という革命路線と響きあうものがあったことは隠しようもないことです。

共産党の文化問題に関わる「50年問題」の文書では、「日本文学協会」は、さらに「これらの人びとに特徴的であるのは、第一に、多くの点でアメリカの帝国主義に従属させられているが、発達した資本主義国である日本を他のアジアやアフリカなどの植民地・従属国と同視して、そこからのいわゆる『解放の文学』として『国民文学』を見、それ以外のものを拒否する立場であり、第二には、明治以来の日本国民の民族的

発展を見ず、日本の近代文学の否定的面だけを強調して、その積極的な役割を過小に評価し、それと断絶したところに、『民族独自の形式』をさぐり出そうとする立場である。日本文学協会の文学史家のうちには、古典としての日本の近代文学の意義を否定し、王朝時代や封建時代の文学や芸術をそれと比べて一面的に異常に高く評価するものがあつた(後略)」というように総括の対象にされています(これらの総括文書と当時の文献資料は、日本共産党自身によって公刊されています)。

伊豆さんの丸山評価と猪野評価の問題は、当時の「日文協」そのものの問題を照らし出すものであった、とすることができます。しかし、日本共産党の文書のように、伊豆さんは事態を振り返り、把握してはいません。そうしえなかったことに、伊豆さんの文学研究者と市民運動家としての歩みの特質があります。しかし、このことを否定的に評価すれば事足りるなどとは、わたくしは考えていません。それどころか、こうした足踏みの徹底的な検討が求められています。「戦後の精神」の徹底的な検討が求められているのです。このことの批判が希望に変わる道筋を見出していかなければなりません。そのためには、時空的レベルから次元レベルへの転換の問題として問われていかなければなりません。すると、問題は〈第三項〉論の課題になっていきます。

時空的レベルにおける整理と総括だけではポスト・ポストモダンの時代を拓くことはできない、と言っていいでしょう。モダンとしての客観主義(実体主義・自然主義)からの探究に思考が止められてしまっているからです。これは、日本共産党の総括の仕方とは異なります。この団体の科学的社会主義は、モダンとしての客観主義(実体主義・自然主義)を前提にしているからです。もちろん伊豆さんが考えていたこととも異なります。伊豆さんは、モダンとしての客観主義(実体主義・自然主義)を前提にしていますが、にもかからず、「ああ言えばこう言う」になってしまっているのです。伊豆さんの識関下からの折り返しは、わたくしに自己倒壊を促し、宿命の創造という道を拓いていくことになります。そのために、折り返しは客観主義(実体主義・自然主義)によってではなく、時空的レベルではなく、次元レベルでなされていくことが求



められているのです。「戦後の精神」が問題化されることが必須の課題となります。伊豆さんが、そのようにはされることはありませんでした。このことが、伊豆さんの思考の牢獄になっていたのです。

こうした指摘は、おそらく伊豆さんにとっては想定外のことでしょう。しかし、伊豆さんに問われていたのです。このことは、マルクス主義の反映論自体の問題にもなっています。

伊豆さんの話は30年以上も前にお聞きしたのですが、その時は、今では再入党の誘いがあるが、いまさら戻れない、とおっしゃっていました。「あの時」のことがあるからね、と。その後、どうされたのかは知りません。しかし、このことに関係なく、市民運動への参加は、伊豆さんにとって、革命への志の中にあり、このことは自らの思想の実体化になっていたのです。こうした意志は生涯、挫けることはありませんでした。

ここで、先の報告に戻ります。

## 2. 「作者」、「作家」、「語り手」の一体化、袋小路の二重構造

伊豆さんの報告の焦点は「教条主義」批判でした。その根拠としての「実体主義」批判です。伊豆さんは、『父母未生以前の本来の面目は如何』という間は漱石の作品中に幾度となく出て来る言葉であります。漱石は事実としての現実を、それが事実であるからという理由で絶対化し固定化して、事実呪縛されることを拒否しました。事実を無視する論理は拒否したが、しかし同時に事実がそのまま真実ではないことを自覚し、事実の底にある真実を求め、その事実の意味を追究したのであります。何故この事実がこうした事実として事実であるのか。漱石は事実のよって来る所を見きわめようとし、事実の呪縛から解放されようとしています。自分自身に縛られることをさえも欲せず、自分自身を客観化し相対化し自分自身からの解放を求めたのであります」と提起していました。

こうした考え方はその時に始まったわけではありません。伊豆さんにおいては、1950年代から晩年まで変わることはありませんでした。氏は、「戦後の精神」＝「生きていること自体を前提にして」を生き続けていきました。〈自他未分の意識構造〉が識関下で

伊豆さんを動かし続け、「ああ言えばこう言う」を現象させていたのです。そこには実体主義が胚胎していました。このことは、伊豆さんが「天皇制」とともにあり続けていたということになります。しかし「喜び」の「戦後の精神」がこうした事態を消去してしまっていたのです。

伊豆さんは、漱石は「事実」をめぐる袋小路の脱出を「事実を無視する論理は拒否したが、しかし同時に事実がそのまま真実ではないことを自覚し、事実の底にある真実を求め、その事実の意味を追究」することによってなさんとした、と言うのですが、漱石に仮託して語られる袋小路の脱出路は依然として袋小路の中にありました。伊豆さんは、漱石の「父母未生以前の本来の面目は如何」について論じ、「事実の底にある真実を求め、その事実の意味を追究」することに活路を見出します。伊豆さんは、「自分自身を客観化し相対化し自分自身からの解放」という難問を、脱出路として何のためらいもなく語ってしまっているのです。反映論に対する確信です。このことは客観主義（実体主義・自然主義）に対する確信と富にありました。モダンの思考です。これでは「事実」が「真実」にされてしまうことによって、「父母未生以前の本来の面目は如何」という問いの衝撃性が消されてしまいます。この問いに孕まれている到達不可能性という難問が看過されてしまいます。伊豆さんは、このことに気がついていません。伊豆さんの切実さを受け止めるとともに、また当時の伊豆さんの革命運動に関わる身辺的困難さ（辛い出来事）もお聞きしているのですが、すでに本稿で紹介もしているのですが、そう言わざるをえません。氏は、実体主義に「ああ言えばこう言う」というように向き合いましたが、それゆえに、振り回され続けていたのです。

伊豆さんは、教条主義を超えることはできませんでした。実体主義もを超えることはできませんでした。問題が生じると、向日的な用語、「人間的」とか「光」とか、さらなる困難に対しては、「暗黒」という用語で対処しようとしていました。このことは、文学作品の読みにおいて「作家」、「作者」が分けられることなく使用される事態と一体のものでした。それだけでなく、ときに「語り手」という用語が用いられても、それは「作家」、「作者」と同義に使われていました。こうした混濁を混濁のまま生きていました。「戦後の精神」

に支えられ、それに封殺されることによって、です。これは〈自我未分の意識構造〉の現れそのものだったのです。

このことについては、伊豆さんの方法論的な到達点を示していると思われる、1988年発表の『『猫』の誕生——漱石の語り手——』（7）を参照していただきたい。この論考で、氏は、『吾輩は猫である。名前はまだ無い。』作品『吾輩は猫である』の冒頭のこの一句を書き記した時、作家漱石が誕生した」（傍点——引用者）、『吾輩は猫である』という言葉は、見方を変えれば、作者漱石が自分を「吾輩」と呼んで、（中略）この惨めな捨て猫と何の違いもありはしない、自分は猫なのだといっているを読むこともできるだろう」（傍点——引用者）、『『猫』の語る『猫』の物語だから、この物語は、どんな詰まらぬ事でもおかしいのである」（傍点——引用者）というように記述しており、「作家」、「作者」、「語り手」を「仮構」というように繋げて論じています。そして「見るものは見られる者であり、批評する者は批評される者である。『猫』もまた見る者、批評する者でありながら、同時に見られる者、批評される者であった。作品世界の全体を見渡し、作品世界を統括する絶対的な人物は、作中人物としては勿論、語り手としてもいないのが漱石文学の世界の特徴である。そこに多声言語的（ポリフィニック）な世界として展開されて行った漱石文学の世界の特質がある」と提起しています。

### 3. 「多声言語的」（ポリフィニック）をめぐる2つの立場は1つの立場

この「多声言語的」（ポリフィニック）への注目は、後で触れることになりますが、三谷邦明さんの「天皇制」批判の言説に重なっていきます。

伊豆さんは「天皇制」を「外部」とし、「多声言語的」（ポリフィニック）を作品の「内部」に見出し、「内部」によって「外部」を問題化できる、と考えました。このようにして、モダンの言説に縛られつつ、エセポストモダン＝エセ価値相対主義に陥っていきます。そもそも、「多声言語的」（ポリフィニック）を作品の「内部」とすること自体が、「多声言語的」（ポリフィニック）を「多声言語的」（ポリフィニック）

ではないものにしてしまうことになるのですが、この根本的矛盾に伊豆さんは気がついていません。先にも触れましたが、これは、文学作品の読みにおいて「作家」、「作者」が分けられることなく使用される事態と一体のものだったのです。〈80年代問題〉に巻き込まれていきます。

三谷さんは、「天皇制」を「外部」の排除であるとし、ポストモダンの言説に縛られつつ、「多声言語的」（ポリフィニック）を「外部」として対置していきます。しかし、この「外部」も〈語ることの虚偽〉という事態に囲い込まれています。「外部」は作品の「内部」だったのです。それでも「多声言語的」（ポリフィニック）を「外部」としようとするのですから、三谷さんは実体主義に陥っていかざるをえません。この根本的矛盾に三谷さんは気がついていません。したがって、これもエセポストモダン＝エセ価値相対主義になっています。〈80年代問題〉そのものです。

問題は、こういうことです。

伊豆さんと三谷さんでは何を「外部」とするかでは決定的に異なっているのですが、「外部」を実体として想定している点では共通しています。ここに客観主義（実体主義・自然主義）が忍び込んできてしまっています。

### 4. 〈近代小説〉と〈近代の物語文学〉の違い、概念としての〈他者〉へ

それゆえに、両氏とも、その後、1990年に提起された田中実さんの「概念としての〈他者〉」（8）という提起を見逃がしてしまいます。このことは両者の〈近代小説〉と〈近代の物語文学〉の違いという問題に関する足踏みになっています。伊豆さんには「違い」という問い自体がありません。三谷さんには「源氏物語」を〈近代小説〉の先駆であるという視界を拓いてくことになります。〈近代小説〉は客観主義（実体主義・自然主義）に対抗して誕生し、事態をポストモダンに止めることなく、ポスト・ポストモダン委の時代に拓いていこうとしたのです。伊豆さんと三谷さんにはこうした視界が閉ざされてしまっています。全く自覚されることなく、獄に繋がれてしまっています。

田中さんは「天皇制」の問題を「〈他者〉を〈他者〉として機能させず、対象を対象として距離を置く（他

者化する)のではなく、自己のなかに呑み込んで対象と(自己化)して増大化していく」働き、「〈個〉が自立しないだけでなく、『関係のなかの孤』のかたちをとり、〈自他未分の意識構造〉が顕在化していく。それはまた〈対話〉が〈会話〉に留まり、モノローグ化して〈対話〉を拓くことのできない世界でもある」と論じ、柄谷行人の「他者を『概念』でなく、『観念』だとする立場」に対して、「氏が退けた『概念』を〈他者〉と設定しておくこと」を提起していきました。田中さんは「戦中から戦後、制度の巨大な転換にもかかわらず、日本の精神的土壌はいかほども変わりはない」とも提起しました。この小論の最後に、氏は「作品は読者の読みによって作品となるが、その読者の恣意的な読みをも超えて、作品表現に込められた内的必然の糸による織模様が内在化されているのが明らかにされなければならない。〈わたしのなかの他者〉、了解不能の〈他者〉、そして《他者》、それぞれの虚構の概念装置は日本文学の中に織り込まれた必然の糸、あるいは〈天皇制〉を抱えた日本の土壌そのものを解明すると期待したい。自己を再建する〈歴史〉と〈主体〉の場所もそこにあるはずである」と記しています。この「期待」は〈第三項〉論の現れに向かっていきました(本稿の表題は、こうした田中さんの提起によって引き出されていったものです。このことは1989年12月に『〈対話〉をひらく文学教育——境界認識の成立——』(有精堂)を刊行したわたくしの、30年に及ぶ、遅々とした歩みの中でたどり着いた地点です)。

その上で、こう言いましょう。

伊豆さんや三谷さんの陥っていた事態は〈80年代問題〉の現れであった、と(再度申し上げますが、「天皇制」問題をめぐっては、本稿のⅥの1、2、3を参照していただきたい)。

## V. 「観念」と「肉体」をめぐる袋小路、丸山静と猪野謙二

こうした問題は、「国民文学」論争の時代に登場した丸山静と猪野謙二の近代文学に対する考え方の、伊豆さんの受け止め方に関わっていきます。丸山と猪野に共通していたのは「私小説」批判、リアリズム論の深化の試みです。両者ともに戦前のプロレタリア文学運動、戦後の民主主義文学運動に対する批判をされて

いました。直接的な対象は蔵原惟人であり、中野重治であり、宮本百合子でした。

### 1. 「国民文学」論争という鏡に映し出して

このあたりのことについて触れているものに、小泉浩一郎さんの「丸山静『現代文学研究』」(9)があります。小泉さんの論考は、丸山と猪野の動向が「人民文学」派の「新日本文学」派に対する政治的策動としてのみとらえられている常識に対して、そうした「政治と文学」の眼鏡をはずして、丸山らの動向の意義を捉え直そうとしたもので、「国民文学」論争評価の常識、共産党内の権力抗争としてのみ見ようとする戦後文学史観には抗っているのですが、丸山の論が抱え込んでいた正しさの自閉性は問われていません。そのために、小泉さんの文章は、1980年代の状況の中で、好事家的文章として受け止められてしまったのではないのでしょうか。もちろん小泉さんはポストモダンの風に抗うという自負のもとに、この文章を書かれたのです。しかし、空回りしてしまっています(このことは小泉さんの問題として別に論じなければなりません)。

こう言わなければなりません。

今日の日本文学協会の問題は、「国民文学」論争の総括を棚上げしてあり続けてきたことに起因している、と。もちろん協会の創設自体に孕まれている、近藤忠義の「統一戦線」方式という問題にも起因しているのですが、この点に関しては、自覚的に、とうとう未だに日本文学協会の会員ではない山田有策さんの、「綱領」など認めていないのに会員である、親しい友人たちに対する「軽蔑」についての思いを綴った文章を前提にして考えていかなければなりません。

山田さんは「国民文学論の提唱を頂点として日本文学協会は組織体として最早風化したのかとの感を抱かざるを得ない」と言い切っています。適切な、1970年代という時節にふさわしい批判です。これは、もちろん今でも正対し続けなければならない批判であり、わたくしは真正面から刃を突き付けられている思いです。自らのやっていることはこの批判に込めているのか、このとき以来、折に触れてそう思うのです。怯えているのです。それが国語教育部会へのこだわりになっている、と言ってもいい。(10) 山田さんの、わた

くしたちの研究の根拠に関わる告発に向き合い続けていかなければなりません。これは「日文協」の生死に関わる問題です。

今は亡き畑有三さんの「綱領」へのこだわりも、委員人事に関するこだわりも、理解されることがなかったように思いますが、山田発言が拍車をかけた、と見ることができます。当時、常識は畑さんに冷たかった。ポストモダンの風、いや、エセポストモダン＝エセ価値相対主義という事態は畑さんに冷たかった。自らの損得、処世術の範囲で畑さんは敬して遠ざけられていたように思います。畑さん自体が、エセポストモダン＝エセ価値相対主義という事態に対して共犯的でありましたから、話はややっこしい。何が何だかわからなくなってしまっていました。多数の常識は正義、少数の常識はピエロにされてしまっていました。両者が同時に問われていたのに、事態はそうようには把握されていませんでした。腐敗臭に満ちた「日文協」、そうした事態が総会のたびに晒され続けていたのです(畑さんとわたくしの間の、こちらからすれば言いがかりに等しい委員問題をめぐる事件については、別に書いたことがあります)。

わたくしは、「綱領」を教条とせよということで、こうしたことを記しているのではありません。山田有策さんの批評は極めて鋭いものでした。しかし、その後も日本文学協会はあり続けました。喉笛に鯛の骨を刺したまま、です。しかし、そのことの自覚がないままあり続けている、日本文学協会の神経麻痺の事態に対する苛立ちとして記しているのです。エセポストモダン＝エセ価値相対主義はこうした苛立ちを忘れ、なかったものとして日本文学協会を活用しようとしてきました。ここでは詳細を記すことはいたしません、21世紀の日本文学協会はそうした事態をめぐるトラブルとともにあり続けてきました。戦いの中にありました。

しかし、「日文協」の未来はこうした戦いとともに拓かれていくのではないのでしょうか。いや、壮絶なる見聞えの希求は自己欺瞞なののでしょうか。それともこれは次元的レベルを異にした世界からの言葉なののでしょうか。わたくしの居場所は日本文学協会にはあるのでしょうか。こうした声はあなたには聴こえてこな

いのですか。わたくしたちは何処で、何をしてきたのか。何をしようとしているのか。

論を本筋?に戻させていただきます(これも本筋なのですが、ね)。

## 2. 丸山静と猪野謙二、「観念」から「肉体」へ、「客観的基準」をめぐる

伊豆さんは、『現代文学研究』(11)の著者である丸山静の、先鋭な日本近代文学批判に強くひかれつつ、それを猪野謙二の日本近代文学史観の側で受け止め直していきます。(12)これは常識的な選択です。いまでも異論は出されないのではないのでしょうか。

伊豆さんは、丸山の「自己否定」へのこだわり、物事を切羽詰まった場で捉えようとする「シュチュエーション」論(13)を猪野の側で受け止め、「観念」から「肉体」への問題として「柔軟」に受け止め直してきました。透谷の「観念」としての「生命の思想」から藤村なりの「肉体」としての「生命の思想」へというように、です。(14)伊豆さんは、『書評』猪野謙二著『島崎藤村』(15)において、この本は「透谷のたかひが敗北したところ、その悲惨な死から藤村の文学が発効していることの意味を明らかにしている。藤村は社会的矛盾との対決をさけ、そのような矛盾の中に生きる自己の肉体を精いっぱい肯定することによって辛うじて芸術家として自己を定着することが出来た。その出発点のありようがその後の藤村の文学、さらには日本の近代文学の展開の様相を制約しているとして、著者はそこに日本近代文学の『悲しい運命』を見るのである。しかし(傍点——引用者)ながらそれを逃れ得ぬ宿命として見るべきでないことは、著者自身がその後二葉亭、魯庵、漱石、独歩、啄木等々の研究を通して、明らかにしている」と言うのです。「しかし」の前後は逆説ではありません。「しかし」は弁明として使われています。戦争で死ぬことなく、「戦後」を生きることのできた伊豆さんにとって、猪野の言葉は自らに対する肯定的な意味づけとして受け止められたのでしょうか。「肉体」としての「生命の思想」への注目は、「戦後」の伊豆さんにとっては激励の声に聞こえたに違いありません。大学を卒業するか、

しないかの頃、よく猪野の家に行き、一方的に話しては帰ってきたとのこと。猪野はその話を黙って聞いていたそうです。

対して、丸山は、「しかし」という接続詞が相反する事態を許容する言葉として使われるのは問題把握の曖昧さの現れである、こうしたこだわり方をする人でした。『……は、たしかに劃期的であった。……しかしその反面』という具合に、これまで私たちが全力をあげ、一致してうちだしてきた新しいコース、新しい観点を、『劃期的』というような言葉で認めることはいちおう認めるけれども、すぐにそれにつづけて『しかしその反面』といって欠陥や不足の面を補うことばかりを前面におしだし、やがてはそれを全面的な問題であるかのように展開していく、こういう論理がほんとうに発展的な論理と言えるかどうか、私にはどうも納得ができないのである（傍点——引用者）(16) というように、猪野の「しかし」の使い方に対する違和感を述べています。丸山には、猪野の研究は「客観的基準がぼやけている」ものである、と見えていたのです。この言説は、マルクス主義に支えられています。「スターリン論文で明らかにされたような意味においては、私などはなかなか物事の客観性ということをつめていなかった」と述べています。(17) 丸山は厳密さにこだわる人だったようです。伊豆さんは、こうした丸山に強くひかれていくと同時に、丸山に、自らの論理を絶対化することによって、作家と作品を否定し、「自己否定」が自己絶対化になってしまっているパラドックスを見出しています。そこで、伊豆さんは、研究の対象を肯定的に受け止めようとする猪野に寄り添うのですが、丸山を退けることができなかったのです。丸山の「客観的基準」へのこだわりを退けることができない。なぜか。学問としての文学研究にこだわっていたからです。それゆえに、「ああ言えばこう言う」という事態に引き裂かれていきました。伊豆さんは、日本文学協会ではじめての大会報告のとき、報告は翌日なのに、丸山に「あなたの意見には異論がある」(18) と言われたそうです。まだ大学生だった伊豆さんに対して、です。丸山は殺気に満ちた人だったようです。

### 3. 「戦後」という価値、牢獄への反転

伊豆さんは晩年に至るまで、事態を、丸山と猪野の「私小説」批判、リアリズム論自体の問題として把握することはできませんでした。そして、亡くなりました。伊豆さんは二重の牢獄の中に幽閉されていたといえることができるでしょう。失礼な言い方になるかもしれませんが、平和運動や市民運動へのエネルギーはそれゆえに醸成されていった、とすることができます。この「肉体」としての「生命の思想」の現れは価値あることです。しかし、その充実感によって、伊豆さんは二重の牢獄から解放放たれることはありませんでした。それどころか、獄の脱出口はますます見えなくさせられてしまっていたのです。

学問は問われ続けました。

それゆえに、鬱陶しい気分は晴れることはありません。あのぼそぼそとした、しかし、激しい口調はそうした事態の表出だったのではないのでしょうか。伊豆さんは、人を見て話すことをされませんでした。見えない獄の脱出口を探りつつ、言葉を紡いでいったのです。獄の脱出口は「戦後の精神」自体に対する問題化とともにあったのですが、このことを、伊豆さんは次元レベルの問題として問うことはできませんでした。

伊豆さんの、丸山にひかれつつ、猪野にもひかれていくという事態は、死の恐怖に（殺されるか殺すか）直面させられた戦争体験と響き合っています。これが、氏にとっての1ヶ月弱の兵役の、決定的な意味だったのです。時間の長さが問題なのではありません。体験の過酷さが問題なのではありません。事態の原理が問題なのです。殺されるか、殺すか。それゆえに、「戦後」の平和と民主主義は、伊豆さんにとって至上の価値となったのです。命が育まれ、守られる前提だったからです。伊豆さんにとっての戦後の選択はマルクス主義の文献を読んでのものではありません。「肉体」としての「生命の思想」に動かされてのものでした。同時に、この選択は迷路の選択であったのですが、伊豆さんはそのようには考えていませんでした。時空的レベルには次元レベルへの入り口がないにもかかわらず、です。時空的レベルでの戦いが問題です。そうした事態の中で、島崎藤村が卒論のテーマとして選択されていきました。このことは伊豆さんの識閥下を問うています。〈自他未分の意識構造〉という妖怪に飲み込まれた伊豆利彦の識閥下を論じようとしています。焦点は「天皇制」問題になっていきます「自己

化」の問題になっていきます。

伊豆さんは、猪野の『島崎藤村』に対する書評において、「著者にとってはリアリズム論を深めることは自己の現実に対する対決の仕方を新しくすることであり、そのことによって藤村に投げかける光は新しくされていっている。新しい現実および自己の発見と作家の本質へのいつそうの肉迫ということが、この著者の場合、その出発の当初から今日に至るまで一貫している」と指摘していますが、この猪野の言葉を伊豆さんは自分に対する言葉として受け止めていたのではないのでしょうか。伊豆さんは「観念」でなく、「肉体」で「戦後」を受け入れていたのです。しかし、「肉体」の唯一性へのこだわりは、その複数性を開いていきます。命ある「肉体」の無限の存在の中に、このわたくしの「肉体」があるからです。このことの発見は、平和運動、市民運動の原理とはなっていきますが、認識（読むこと）の根拠にかかわる問題を拓いていくことにはなりません。認識（読むこと）のトラブルを前にして、伊豆さんには丸山の「客観的基準」、マルクス主義の声が聴こえてきます。このことの現れが「ああ言えばこう言う」です。猪野ではもの足りない。伊豆さんにおける「事実」とは何かの迷走はこのように始まったのです。こうした迷走の中に伊豆さんは妖怪の現れを見出すことはできません。時空的レベルでの迷走には次元的レベルへの入り口は開かれていないからです。この混迷の脱出口は、時空的レベルには開かれておらず、次元的レベルに開かれているのです。パラレルワールドという事態の中に伊豆利彦を解き放つことが求められています。これが《伊豆利彦そのもの》の〈影〉との対話の課題です。〈影〉を紡ぐことの意味です。

#### 4. 大森荘蔵の「真実の百面相」ともう1つの「戦後」の現れ

1976年には、大森荘蔵が、「事実」と「真実」をめぐって、「真偽」をめぐる「生活上の分類」と「世界観上の真偽の分類」の違いを提起していましたが、伊豆さんにはこのことは視野に入っていなかったようです。大森荘蔵の「真実の百面相」の提起は、「真偽」をめぐる「生活上の分類」を実体化して事態を問題にしています。言葉の相互理解が社会的約束事としての「観念」、〈わたしのなかの他者〉に依拠しているに

もかわらず、そのことを等閑に付して「本物—写し」という「危険な世界観」に陥ってしまう事態を問題にしています。これでは事態の本質的虚偽性を問い、「世界観上の真偽の分類」という世界観認識への、〈世界像〉の転換の道は絶たれてしまうからです。「真実に対する誤り」にこだわり、「真実の中での誤り」の問題という事態が問われていくことはありません。「ああ言えばこう言う」になります。ここで注意を喚起しておきたいのは、大森は「真偽」をめぐる「生活上の分類」自体を否定しているのではないことです。このことを「本物—写し」とし、実体主義に陥ってしまうことを「危険な世界観」として問題にしているのです。(19)

「戦後」を問題化していくと、こうなります。

大森によって照らし出されているのは、もう1つの「戦後」という事態です。「真偽」をめぐる「生活上の分類」としての「戦後」だけでなく、「世界観上の真偽の分類」としての「戦後」という事態が浮かび上がってくる、と。1945年8月15日は「真偽」をめぐる「生活上の分類」としての「戦後」の起点ですが、1980年代は「世界観上の真偽の分類」としての「戦後」が問題になっていった時代だったのです。後者においては、日本における「ポストモダン」が「戦後」として問われていきます。これは伊豆さんの世界観認識ではありません。伊豆さんは「真偽」をめぐる「生活上の分類」としての「戦後」を、1945年8月15日を起点にして捉えています。「肉体」としての「生命の思想」＝「戦後の精神」によって、です。伊豆さんにとって、多くの国民にとって、このことに違和感はありません。このように捉えない人々もいるのですが（たとえば、国際法上戦争状態が終了していない国家、国家としては戦争状態が終結しているが、個人としてはそのことに同意できない場合などを思い起こすことができます）、それらの人々にとっても「戦後」は「真偽」をめぐる「生活上の分類」である限り、事態は時空的レベルで解決するしかありません。問題の焦点は、いずれの場合でも「戦後」を「本物—写し」というような実体主義で捉え、思考を停止してしまっている世界観認識を生きていることにあります。大森は、こうした事態を「危険な世界観」である、と言っ

ているのです。

こうなります。

「本物一写し」というような実体主義はモダンの前提です。これは客観主義（実体主義・自然主義）ともにある、と。この点では、1945年8月15日は「戦後」の起点ではありません。この時点で、モダンは「戦後」を迎えていなかったからです。1945年8月15日を「戦後」としてしまっている事態の中には、こうした問題が潜在しています。このことは、時空的レベルの問題ではありません。次元的レベルの問題です。だからと言って、「真偽」をめぐる「生活上の分類」としての「戦後」、1945年8月15日を起点にすることにこだわることに意味がないなどということには断じてなりません。しかし、このことを「本物一写し」というような実体主義で捉え、思考を停止してしまっているなどということにも断じてなりません。これでは、もう1つの「戦後」という事態を看過することになってしまうからです。1980年代「戦後」論は、「世界観上の真偽の分類」を問い、ポストモダンを問題として浮かび上がらせます。わたくしたちに、〈80年代問題〉を問い、ポスト・ポストモダンの時代をいかに拓くのかという課題を迫ってきます。ということで、今日、2つの「戦後」をめぐるそれぞれの課題にいかに対応するのかが求められているのです。

しかし、とすると、こう問わなければなりません。

伊豆利彦の「戦後」は「危険な世界観」に封殺されてしまっているのではないかと。伊豆さんの「戦後の精神」を問題化していくことが求められています。そのためには、「事実」と「真実」をめぐる混迷が問われなければなりません。にもかかわらず、丸山も猪野も、そして伊豆さんも、そのように問題の核心を捉えていません。三様の虚偽の坩堝の中での彷徨を、わたくしは問わないわけにはいかないのです。伊豆さんに向き合い、わたくしたちには、「観念」から「肉体」へが「透谷」から「藤村」へと論じられていく、これが常識とされている事態の転覆が求められています。このままでは、三者とも「透谷」の「観念」の問題が何なのかを捉えることができない、こうした事態が続いていってしまうからです。事態は三者に限った問題ではありません。伊豆さんはポストモダン向き合うことなくエセポストモダン＝エセ価値相対主義

に歩調を合わせてしまいました。これは「迎合」と呼ばざるをえない事態です。このようにして、伊豆さんは〈80年代問題〉に巻き込まれていったのです。この事態を超えていくことがわたくしたちの課題です。

## VI. 概念としての《他者》へ、「天皇制」と「国語科」の捉え直しのために

1980年代になって、「ポストモダン」が問われる時代になると、丸山も猪野も忘れられていきましたが、問題にされなくなっただけで延命し、伊豆さんも問い質されることなく、仕事を続けていきました。〈80年代問題〉に守られて、です。

### 1. 〈80年代問題〉の中の伊豆利彦、概念としての《他者》の看過に焦点化して

1987年、伊豆さんは、『現代文学研究』について、「激しい思いをこめて述べられた日本の知識人や、日本の文学に対する期待は裏切られた。『上からの民主化』、高度資本主義の発達、大衆社会、情報化社会の実現に、『下からの近代化』はまたしても追い越されてしまった。この本はすっかり時代遅れになったと思う人も多いだろう。しかし（傍点——引用者）、この本で追及された問題はまだ実現されていないのだから、やはり、それはいつかまた問題にならずにはいないのだろう」（20）と言っています。〈80年代問題〉を超え、ポスト・ポストモダンの時代を拓いていく取り組みの中では、「観念」として捉えられていた問題が、「概念」の問題として問われていくことになるにもかかわらず、です。伊豆さんの「しかし」はこのことを妨げています。この「しかし」は、猪野風です。

こう言わなければなりません。

伊豆さんは、「この本で追及された問題はまだ実現されていないのだから、やはり、それはいつかまた問題にならずにはいないのだろう」と言うのですが、こうはならない、と。いや、そうであっては、事態が新たに切り拓かれていくことはない、と言わなければなりません。丸山にも「概念」の問題は視野に入っていないからです。

ここが問題の急所です。

「観念」は認識論に対応し、「概念」は實在論に対応



していきます。この實在論は到達不可能な、了解不能の《他者》を問題にしていきます。こうした視界が1980年代以降になっても伊豆さんには拓かれていません。今日、田中実さんが提起する〈第三項〉論と向き合う中で、事態が新たに拓かれていくにもかかわらず、です。〈第三項〉論が問う世界観認識、〈世界像〉の転換という課題に向き合うのか、どうか、が問われていきます。

〈第三項〉論では〈主体〉と〈主体が捉えた客体〉と《客体そのもの》という世界観認識が提起されています。〈世界像〉の転換が提起されています。認識（読むこと）の根拠は《客体そのもの》の〈影〉にあります。《客体そのもの》＝概念としての《他者》が問われています。「観念」が問題にするのは〈主体が捉えた客体〉であり、「概念」が問題にするのは到達不可能な、了解不能の《他者》です。(21) 認識（読むこと）の具体的行為のレベルでは、〈近代小説〉と〈近代の物語文学〉の違いが〈語ることの虚偽〉の問題として問われています。〈近代小説〉の神髄が問われています。問題の焦点を「観念」から「肉体」へ、ではなく、「観念」を「概念」の問題に捉え直し、北村透谷に出会い直していく、このことが求められているのです。

問題は、時空的レベルから次元的レベルに転回していきます。透谷の「観念」は時空的レベルの問題なのではないのではないのか。次元的レベルの問題だったのではないのか。そのレベルで「肉体」として問われていたと想起することができるのではないのか。透谷の場合、「肉体」は時空的レベルの中で想起されていくのではないのです。時空的レベルを超えて、次元的レベルで想起されていくのです。とするならば、「観念」は「概念」として問われていかなければなりません。概念としての《他者》が問われ、パラレルワールドという事態が拓かれ、「天皇制」が問われていくのです。

## 2. 二項論としての「天皇制」論、「外部」の実体化の看過

先に少し触れたことですが、伊豆さんが探究していた「近代文学と天皇制」の問題にも、〈第三項〉論は関わってきます。伊豆さんの著作に『漱石と天皇制』がありますが、本稿では、その刊行後、氏が1990年の日本文学協会の大会で報告された「『近代の超克の周辺——林房雄「勤皇の心」と『青年』——」(22)を取り上

げます。伊豆さんの「天皇制」研究の総括とも言える、この論文には、問題の所在が分かりやすく示されているからです。

伊豆さんは、まず「日本文学にとって、天皇制は日常的な生活や言語を奪い取り、破壊する『他者』以外の何者でもないということを離れてこの問題を論ずることは出来ないという思いに駆られるのです」、「たしかにそれは日本人の内部の問題であり、文学内部の問題であると思います。その外部性と切り離して、内部の問題としてのみ考えるなら、問題の本質を見失い、神秘的、宿命論的な迷路から出ることが出来なくなります。天皇制の問題は文学の外部の問題でありながら、同時に、文学の内部の問題なのです。文学の内部と外部の不可分性を、天皇制の問題は嫌でも意識させます」と言っています。

ここで問題なのは「外部」と「内部」の二項論です。

伊豆さんは「天皇制」は『「他者」以外の何者でもない「外部」であり、「その外部性と切り離して、内部の問題としてのみ考える」な、と言うのです。これでは、「天皇制」は自明な客体として想定されていることになり、「ああ言えばこう言う」という事態に巻き込まれていきます。〈わたしのなかの他者〉としての「天皇制」を問題にしていくためには、《客体そのもの》としての「天皇制」を、了解不能の、到達不可能な《他者》としての「天皇制」の問題として検討していかなければならないのに、そのことが看過されてしまっていました。「外部」の実体化が問われなければならないのに、です。

この報告は、「〈他者〉と天皇制」というテーマの下で、北海道大学で開催された日本文学協会の大会でなされたものであり、以上のことは、同時代的に伊豆さんに問われていたことです。田中実さんが協会の運営委員長の時代のことでないと記憶していますが、なぜそうならなかったのか。そこに「二等兵」としての伊豆さんの「戦後」の問題があります。〈ポストモダン〉を「戦後」として捉えることは伊豆さんには思いもつかないことでした。なぜか。「おぞき苦悶」（島崎藤村）とともに「戦後」があったからです。「肉体」としての「生命の思想」を前提にして、「天皇制」が論じられているのです。このことは、すでに述べてきた「透谷から藤村へ」という文学史の把握に連動していきま

す。

伊豆さんは、この報告で、林房雄の「勤皇の心」と『青年』を取り上げています。「転向小説」の問題として、です。この細論は、林房雄の、伊藤俊輔の、井上聞多の「転向」を問題にし、「俊輔らが長州藩を攘夷から開港に転換させて、藩を破滅から救おうとしたように、プロレタリア文学を『攘夷』から『開港』に転換させ、プロレタリア文学を文学として国家権力の弾圧から守ろうとしました」、「頑迷で現実を知らぬ藩政府の指導部に対する俊輔や聞多の激しい戦いは、『青年』執筆中に展開された作家同盟指導部との激しい論戦と重なり合っています」と論じられています。そして「林の『理想主義』はますます天皇主義の傾向を強め、超国家主義的右翼に転じていきます」と展開し「理想主義」は『「純粹を求める気持ち」』『「純粹と純潔」』『「美しい理想」』、そして『美文調』が、『天皇制と文学』を考える場合の大事なキーワードである」と指摘していきます。こうした細論においても「外部」がいかに「内部」に転じていくかが論じられています。「肉体」としての「生命の思想」の現れとして、です。しかし、自己劇化を招来する「天皇制」の魔力の具体的な考察はなされていません。二項論にからめとられてしまっています。この事態そのものが「天皇制」の問題に通じていくにもかかわらず、です。こうしたメタ認知の視界が「作者」、「作家」、「語り手」を1つのものとする伊豆さんには拓かれてはいなかったのです。「ああ言えばこう言う」に陥っていきます。依然として伊豆さんは「戦後の精神」に幽閉され続けます。氏はそのことに気がついていません。時空のレベルを生き、次元的レベルを排除し続けているからです。

### 3. 三谷邦明と伊豆利彦の一体化、課題を照らし出す田中実

ここで、「伊豆さんが探究された『近代文学と天皇制』の問題に、〈第三項〉論は関わっていきます」とはどういうことかについて、ある討議の記録を対置して述べていくことにします。それは、1988年に開催された「〈パネルディスカッション〉日本文学における《他者》——〈天皇制〉の問題をめぐる——」(23)での、三谷邦明さんと田中実さんのやり取りです(1980年代

から1990年代初めにかけての日本文学協会では「制度と表現」、「虚構」、「〈他者〉」、「〈天皇制〉」をキーワードにして大会が開催されていました。テーマに関わった企画が『日本文学』でも計画されておりましたが、このパネルディスカッションもその1つです。こうした取り組みは「日文協」とは何かという問いと無縁なことではありません)。

やり取りの展開を追うことは割愛せざるをえませんが、三谷さんは「例えば『源氏物語』がさっき言ったみたいな問題を抱えることができたのは、やはり女言葉という特別な、異質な言語をつくり出したからだと思うんです」(傍点——引用者)、「多声的な言語みたいなものをつくり出さないと、標準語とか、書き言葉の一義的な規定みたいなものでは撃てないのではないか」、「『舞姫』なんかでいえば、やはり雅文体で書いたということを評価すべきで。言文一致体で書かなかったということを評価すべきで。すれ違っているんだ」、「さまざまな言語というのはもう外側にあるわけだから、他者の言語というのを持ち込まなければ……」

(傍点——引用者)と言い、「天皇制というのは共同体の意識の中からは見えないんだ」、「共同体をどういうふうに超えるかという問題が問題になってくるわけです」と提起しています。氏は、「さまざまな言語」は「外側」にあることを、「天皇制」を問題化していく論の前提にしています。このことが「『源氏物語』がさっき言ったみたいな問題を抱えることができた」の前提になっているのです。「さっき言ったみたいな問題」とは、『源氏物語』というのは、ある面では物語の限度を超えた小説的な世界に入り込んでしまっている作品であるという側面もある」ことを指しています。したがって、三谷さんは、「天皇制」の問題を、小説とは何か、〈近代小説〉とは何か、に焦点化されて問題にしようとしていることが分かります。

対して、田中さんは、「多声的な言語というふうな形でさまざまな言語というようなものを明らかにさせていくという意味だけでも、近代小説の場合はどういことになるかという、そういったさまざまな言語が自己化されてしまうところに他者に出会わない問題、つまり近代小説の作家たちなり主人公なりが悩

んできた問題だということを去年の座談会『日本文学における〈虚構〉と〈他者〉』で言ったんです」(傍点—引用者)、「彼らにとって見ようとして見えないことが苦悩であり、そのことが問題でしょう。見えてないというのは、〈他者〉という形では見えてないわけです。見えてない、そういった自己の内部の構造を〈他者〉という虚構概念を通して見ていこうというのが、僕なんかが考えている〈他者〉の概念なんです。自己の中のさまざまな言語というのは、結局自己化されてしまうというところに問題があるわけです」と言い、「外側にあるというふうに自明化できれば、問題はない。外側にあれば、それに対して対応できてしまうわけ。外側にあるものを自明化してしまうから〈他者〉に出会えない。そうでなければ、天皇制の問題はなくなってしまうわけですよ」、「共同体の内部に止まっていたらダメなわけです」と提起し、対峙しています。

三谷さんが「さまざまな言語」は「外側」にあることを論の前提にしているのに対して、田中さんは「さまざまな言語が自己化されてしまう」ことを論の前提にしています。このことが、田中さんの、「天皇制」を問題化していく論のポイントであり、「近代小説の作家たちなり主人公なりが悩んできた問題」である、と言うのです。このように問題は、小説とは何か、〈近代小説〉とは何か、に焦点化され、三谷さんとの決定的な違いが浮かび上がってきます。のちに田中さんが〈第三項〉論として提起していったことが、すでに争点として提示されています。〈語り手〉と〈語り手を超えるもの〉とをめぐる問題も争点として浮かび上がってきます。これは〈語ることの虚偽〉をめぐる問題です。客観主義(実体主義・自然主義)の虚偽性をめぐらる問題です。

では、伊豆さんはどうだったのか。

すでに引用した大会報告でもわかるように、伊豆さんの「天皇制」論議は三谷・田中論争の圏外にありました。したがって、その後も、田中さんの概念としての《他者》の提起と向き合うことはできませんでした。「天皇制」は『他者』以外の何者でもない「外部」であり、「その外部性と切り離して、内部の問題としてのみ考える」な、と言うのですから。なぜ、伊豆さ

んがそのように考えるのか、何が問題なのかについて、すでに述べてきましたから、このことは繰り返しません。伊豆さんの「天皇制」論議は三谷さんに通じ、田中さんの「天皇制」論議とは決定的に異なっている、このことを指摘しておきたい。三谷さんは「天皇制」に対して「外側」＝多声的言語を実体として対置し、伊豆さんは「天皇制」を「外部」＝捏造されたシステムとして実体として論じています。ともに実体主義が前提になっているのです。したがって、三谷さんも伊豆さんも「ああ言えばこう言う」という事態の中に論議が封殺されてしまっています。「天皇制」と2つの「外部」(外側)という事態は「外部」(外側)を実体として想定している点で共通した問題を抱え込んでいます。このことは、小説とは何か、〈近代小説〉とは何か、をめぐる混迷とともに封殺されてしまっています。二人とも、です。

対して、田中さんは、その後〈近代小説〉の神髄の探究に向かっていきました。(24)

#### 4. 「国語科」でも

これも唐突に思われるでしょうが、今日の「国語科」の動向にも目を向けておきましょう。2018年2月14日に高等学校の次期学習指導要領案が公開され、翌月の3月に告示されました。2022年4月に実施されることになります。高等学校では、「国語科」は科目編成が大きく変更されます。必修科目は「現代の国語」、「言語文化」、選択科目は「論理国語」、「文学国語」、「国語表現」、「古典探究」とされました。「文学国語」においては、「文学作品」の教材価値と読むことの根拠とは何か、〈近代の物語文学〉と〈近代小説〉の違い、その指導のあり方など、こうしたことが問題となります。小学校・中学校の学習指導要領の「国語科」の「教科目標」は「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す」と書き出され、高等学校でもほぼ同様に書かれています。「適切に表現し正確に理解する」から「正確に理解し適切に表現する」(傍点 引用者)へ、1989年3月15日告示の「国語科」の学習指導要領にまで戻って書き換えられています。このこともどのように受け止めるの

かが問われています。「理解」の指導とは何をどのようにしたらいいのか、これが問題です。教科及び科目の「目標」は詳細に記述されるように改められているのですが、本稿とのかかわりで注目するならば、高等学校では、「目標」の第2項目に、新たに「他者との関わり」という文言を見出すことができます。「古典探究」では「先人との関わり」となっています。小学校、中学校の「国語科」では「人との関わり」となっていますが、ともに同様の指摘であると把握することができますでしょう。「文学国語」では、新たに「語り手」が指導事項として登場しています。こうした動向に対して、「日文協」の働きかけの反映などとは申し上げる気はありませんが、わたくしたちが「他者」にしても「語り手」にしても一九七〇年代の終わりごろから問題にしてきたことであることは申し述べておきます。しかし、これらのことをどのように問題にしてくのかは突き詰めていかなければなりません。「他者」と「語り手」を実体主義から解放して論じていくことが求められています。

そうでなければ、かつての日本文学協会の「天皇制」論議で三谷さんや伊豆さんが陥っていた事態を超えていくことができません。エセポストモダン＝エセ価値相対主義から解放していく戦いを展開していかなければなりません。こうしたことが、平成の時代が終わろうとしている現在の教育問題、「国語科」問題において、課題とされていかなければならないのです。

この課題は伊豆利彦とは何者なのかの問題と無縁ではありません。「ああ言えばこう言う」問題の検討と無縁のことではありません。〈わたしのなかの他者〉と了解不能の《他者》、〈近代の物語文学〉と〈近代小説〉、語ることの虚偽と〈近代小説〉の神髄、そもそも国語科教育は何をめざすのか、こうしたことが問われていかなければならないからです。そして、「国語科」における「天皇制」をめぐる問題に関わって論じられていきます。焦点は、「ああ言えばこう言う」という足踏みをいかに超えるのか、です。

## 5. 益田勝実の〈転向〉と足踏みも超えて、「日文協」を拓く

こういうことです。

猪野の「しかし」の「ああ言えばこう言う」という事態、丸山の「しかし」の「ああ言えばこう言う」という事態、そして、伊豆さんにおいては、前者は後者によって常に揺す振られていく、こうした事態をいかに超えられのかが「天皇制」をめぐる問題になっていく、と。なぜか。「天皇制」はこうした事態を活用するシステムだからです。これは伊藤博文が発案されている「顕教」としての攘夷と「密教」としての開国の使い分けという事態に通じていきます。前者は正解到達主義、後者は正解到達主義批判の問題です。この使い分けは分っていないが問われません。矛盾として問わないのです。「ああ言えばこう言う」です。臨機応変に自己合理化が図られていきます。こうした事態を許容するのが〈自他未分の意識構造〉です。「天皇制」は、こうした、わたくしたちの〈自他未分の意識構造〉に支えられ、再生産され続けています。(25)

「現代天皇制」においても、です。

伊豆利彦さんの問題は、益田勝実さんの〈転向〉と地団駄という事態と並走しています。(26) 伊豆さんも益田さんも、2つの「戦後」という事態の中にありました。ただし、伊豆利彦の〈転向〉と地団駄は見えにくいのです。この見えにくさはスタイリストの西郷信綱の見えにくさとは違います。伊豆さんの場合、向日的な見得の切り方によって隠されてしまっています。この事態は林房雄と並走している事態でもあります。と言っても、転向者である林の方が、自己断定力が強かった、と言うことはできます。自己断定力の強さが林の転向を支えています。「大東亜戦争肯定論」まで進んでいきます。この事態は伊豆さんと決定的に異なりますが、ともに「肉体」としての「生命の思想」を生きている点では、繰り返しますが、並走しているのです。これらのすべては「ああ言えばこう言う」という足踏みの中の出来事です。時空的レベルを共有しています。次元的レベルでは問題が照らし出されていきません。それゆえに「天皇制」に囲い込まれていきました。このことの自覚によって、「天皇制」が問われていくことができるのですが、伊豆さんにおいては、益田のような地団駄、「〈転向〉の瀬戸際で」という自覚が弱かったのです。これが林との並走という事態に

なります。

「外部」と「内部」の二元論では問題の核心が頭わになっていきません。二元論は問題を消去する仕組み、エセポストモダン＝エセ価値相対主義になってしまいます。「天皇制」に囲い込まれていきます。〈第三項〉論は、こうした事態を問題化していきます。問題を時空的レベルから次元的レベルに拓いていきます。時空的レベルを囲い込んでいきます。時空的レベルを問います。「天皇制」をめぐる大童の事態が現れてくるのです。

## 6. 「文学における〈公〉と〈私〉」の前提として

たまたま日本文学協会の今年の5月の委員会に出席し、文学研究の部の大会テーマが「文学における〈公〉と〈私〉」であり、来年1月の『日本文学』の統一テーマ号が同一のテーマで企画されていることを知りました。この時、わたくしは、ふと「日本文学と天皇制」というパネルディスカッションのことを思い出しました。家に帰って調べたら、1989年9月号の『日本文学』に掲載されていました。本稿で問題にしてきたパネルディスカッションのちょうど一年後の企画です。パネラーの一人が協会の現運営委員長の小嶋菜温子さんで、発言者の中には伊豆さんもいました。司会は田中実さんでした。わたくしは、提案された文学の部の大会テーマに小嶋さんの意志を感じました。

かつてのパネルディスカッションで、小嶋さんは、『竹取物語』を例にして、西郷信綱さんや益田勝実さんの「天皇制」と『竹取物語』をめぐる論点が「天皇制からの自由」にあったと総括され、それに対して、「天皇制」を、「律令天皇制」という実体としての「皇権」と実体ではない「王権」というように整理し直し、「犯し」「穢れ」と「隠蔽」の問題に論を展開しています。前年、問題になった「外部」(外側)と「自己化」の問題については、小嶋さんは直接触れていません。おそらく「隠蔽」の問題がそのことに関わっているのでしょうか。「犯し」「穢れ」は「外部」(外側)のこと、「隠蔽」は「内部」のことというように、です。そうであれば、この原理は藤井貞和さんや高橋亨さんの王朝物語「あわれ論」の相対化、西郷や益田の論の再評価に通じてくるだけでなく、伊豆さんの〈天皇制外部論〉にも通じていくのかも。いや、三谷さんの〈天

皇制内部部論〉にも通じていくのかも。ともかく小嶋さんは「天皇制」を「外部」としての「犯し」「穢れ」と「内部」としての「隠蔽」の「両極」において捉えようとしていたようです。とすると、これも「ああ言えばこう言う」ということの1つにならないか。伊豆さんは、「お話を聞いて興味を感じたのは、天皇や天皇の一族が作品に人間としてどんどん出てくることです。近代では何故そういうことがないのか。逆にそこに近代の特徴があると思うのです」と、前年の〈天皇外部論〉を前提にした発言を繰り返しています。小嶋さんは「天(神)」における「地(人)」に対する「犯し」「穢れ」と「隠蔽」の関係、「地(人)」における「天(神)」に対する「犯し」「穢れ」と「隠蔽」の関係の相互性に注目しています。そうした相互性が念頭がない伊豆さんとは大きな違いがあります。しかし、小嶋さんは「外部」(外側)としての「犯し」「穢れ」を実体として問題にしていますので、何を「外部」(外側)とするかには違いがあっても、実体主義という原理において、伊豆さんとも三谷さんとも通じていくのではないのでしょうか。なお、三谷さんは「犯し」「穢れ」の問題を「多声的言語」の問題として論じてようとされていたのでしょうか。

それから30年、小嶋さんの「天皇制」と文学の探究はどのように深められていったのか。「犯し」「穢れ」論と「隠蔽」論は、現在どのように論じられているのか。わたくしは不勉強でこうしたことを確認していません。今年の大会が楽しみです。わたくしの願いは、「文学における〈公〉と〈私〉」の論議が、1980年代から1990年代の日本文学協会の「制度と表現」、「虚構」、「(他者)」、「(天皇制)」という大会テーマに基づく取り組みの掘り起こし、三谷・田中の論争を踏まえなされることです。

焦点は〈第三項〉問題です。

こうした探究が、久しく文学研究の部では断たれてきました。国語教育部会は80年代以降、一貫してその時代のテーマと向き合い、探究し続けてきました。それが今年度の部会テーマ「第三項がひらく文学教育―読むことの〈価値〉の創造」でもあります。『日本文学』8月号も、大会も同じです。文学研究の部と国語教育の部は共鳴し合う可能性のある大会テーマが設定されたように思われます。80年代以来のことで

す。平成の時代の終わりが紡ぎ出したテーマであるといえるでしょう。ポスト・ポストモダンの時代を拓いていく論議が求められています。

再度、伊豆利彦は何者かに焦点化していきましょう。

## Ⅶ. 「みんなで国語の教科書を読む会」の意義、陥穽の焦点化とともに

伊豆さんが取り組まれた市民運動の一つ、「みんなで国語の教科書を読む会」についても取り上げておきましょう（設立の経緯、わたくしの参加の経緯、およびその取り組みについては、すでに触れました。「肉体」としての「生命の思想」を原理とした運動であることにも、すでに触れています）。

伊豆さんは、1972年の日本文学協会の国語教育の部の大会で、「現代社会の矛盾、その暗黒を見つめることによって、若い世代はその克服をめざし、新しい未来の担い手としての自覚を持つようになる」にもかかわらず、「現在の国語教科書は文部省の指導要領に従って、言語技術主義をとっているが、その内実はおそるべき現実美化と現実屈従の体制的思考を強いられている。子どもの内部の声をききとり、その自主的思考を発展させようとする配慮は著しく欠けている」と問題を提起しています。(27) 伊豆さんの文学教育観は、1950年代と同じ、ブレはありません。1992年の「私たちの会の終わりに」(28)では、1960年代末から70年代初めの学生運動や三島由紀夫の行動を念頭に置いて、「こうした暴力的でアナーキーな傾向に対して、民主主義的な新しい社会と大学を目指す運動も発展したが、私たちも戦後25年間の『民主主義』を僭称する日本の社会と文化の虚偽性と鋭く対決しながら、平和と民主主義を嘲笑する新しい動向にも打ち勝ち、平和と民主主義の思想を生命あるものとして発展させたいと願った」というように、「戦後の精神」の価値について振り返っています。

### 1. 宮澤賢治「よだかの星」と芥川龍之介「蜘蛛の糸」の評価をめぐって

会員もさまざまですから一律に論ずることはできないのですが、奥本佳子さんの「宮澤賢治と芥川龍之介——教材としての観点から——」(29)という論考に対す

る会員らのやりとりに、この会の文学作品の読みのあり方の特質が現れているように思います。このことは、伊豆さんへの共感であり、氏の読みのあり方がいかなるものであったのか、その問題点と課題が何なのかを間接的に語っています。伊豆さん自身も奥本さんの論考が例会で発表された時、会の理念である「わたくしたちは子どもたちの教育を私たち自身の手にとりもどさなければならない」(30)が具現化されたものとして高く評価していました。どこかに、奥本さんの実践に触れて、そのようなことを書かれていたように思います（今、探し出せません）。奥本さんは、宮澤賢治の「よだかの星」と芥川龍之介の「蜘蛛の糸」、「杜子春」などを比較対照し、「賢治の作品の特徴は、人間を個別的具体的な状況を通して描こうとしている点にある」とし、「芥川の場合は、個別の人間を周囲の具体的状況とのかかわりの中で描こうとするより、人間全般の規定——人間はこんな場合、こんな行動をする——の上に描かれている」と提起しました。賢治の作品の方が、芥川の作品よりも、「作品の中から主体的に問題をとらえ、さまざまに問題を発見させていく可能性が開かれている。読者にとって賢治の作品は開かれたものになっている」と提起しています。

奥本報告に対して、『国語がつまらない』に同時に掲載されている母親会員たちの文章にはこう書かれています。横山万里子さんは「この作品が教材として適当かどうか、私は判断が付きかねるが、教えるのはかなりむづかしいのではないかとと思われる。それはこの作品が非常に若々しく、作者の情熱が未整理のまま溢れているからであろう。そして、その点こそこの作品に魅力でもあり、生徒たちもそこにひかれるのであろう」、と。小久保弘枝さんは「賢治のメルヘンの世界が、心を次々に豊かに膨らませていく子、精神世界の内部を見つめて、その神髄にふれる充実感、他の娯楽では味わえぬものであることを感じ取ってくれる子を育てるものと期待します」、と。

奥本さんの読みと母親会員の読みは「ああ言えばこう言う」という事態の現れになっています。このことが許されているのは、奥本さんの読み方も母親会員お読み方も主人公中心の読み方になっていることによります。こうした事態が共存の土俵となっています。「作者」、「作家」、「語り手」を一体のものとして読んでいく読み方も共通の土俵になっています。

「御釈迦様」の言説が「作者」、「作家」、「語り手」の言説にされてしまい、「御釈迦様」に対する「語り手」の批評の言説が問われることなく、そうした批評が「語り手」の言説の虚偽性の表出になっていくことが看過されてしまっています。「健陀多」の「蜘蛛の糸」に対する「頓着」が「御釈迦様」の「健陀多」に対する「頓着」であり、「語り手」の語ることに對する「頓着」になっていることも看過されてしまっています。〈語り手を超えるもの〉としての〈機能としての語り手〉が問題にされていないのです。「健陀多」にとって、蜘蛛の糸は地獄から抜け出す唯一の可能性でした。その蜘蛛の糸に他の無数の罪人たちが縋りつき、上ってきます。絶体絶命です。この緊迫した事態の中で三様の「頓着」問題が浮かび上がってきます(のちに、このことを問題にしたのは、さらに齋藤知也さんです。2005年のことです。『〈語り手〉を読む』ことと『自己を問う』こと——芥川龍之介『蜘蛛の糸』の教材価値を再検討する——(31)という論文においてでした)。

当時、会の中心メンバーだった伊東一夫さんは「走れメロス」について、こう述べています。「メロスの口をついて出る『愛』『正義』『誠』という言葉の向こう側に、ぼくはついにその言葉にふさわしい具体的なイメージを結ぶことができなかった。それは彼の内部の苦しみを通してようやくにして発せられた言葉でないことにもよると思う。／『愛』とか『誠』とか『正義』は大切であるということに誰も異存はないだろう。問題はその中身である。そして、それは『愛』とか『誠』とか『正義』という言葉をむき出して前面に打ち出すだけでは、ぼくらの胸に少しも響いて来ない。その言葉の向こう側に何も見ることができない」、と。こうしたことを問題にすることと、奥本さんが「蜘蛛の糸」の「芥川の場合は、個別の人間を周囲の具体的状況とのかかわりの中で描こうとするより、人間全般の規定——人間はこんな場合、こんな行動をする——の上に描かれている」という問題を提起されたことは同じレベルで論じられていました。(32)これが「みんなで国語の教科書を読む会」の文学作品の読み方でした。方法を前提にした会ではありませんが、見えない方法によって会は縛られていました。〈近代の物語文学〉と

〈近代小説〉は同じレベルで問題にされていました。そこに《伊豆利彦》の〈影〉を見ることができます(本稿では、わたくしの「よだかの星」の読み方については触れることができません。拙稿がありますので、参照してください。(33))。

## 2. 「子ども」という言葉の使い方

さらに付け加えれば、この事態は先に紹介した会の理念「私たちは子どもたちの教育を私たち自身の手にとりもどさなければならない」自体の問題に反転していきます。「子ども」が「私たち」に囲い込まれているのに、「子ども」が独立した存在として捉えられているのです。そうしたことが看過されています。このことは鈴木三重吉の『赤い鳥』にまでさかのぼって検討されなければならない問題(34)であり、ここにも「外部」と「内部」の二項論という事態が現れています。

この事態は、客観主義が疑われるがゆえに「天皇制」に囲い込まれていきます。こうした事態に対して、エセポストモダン＝エセ価値相対主義から解放していく戦いを展開していかなければなりません。〈神〉と〈神〉の闘争の時代となっている現代において、いかにポスト・ポストモダンの時代を拓くことができるかが問われているのです。

かつての奥本さんを問うているのではありません。伊東さんを問うているのでもありません。いまだ「みんなで国語の教科書を読む会」を生き続けている須貝を問うています。識閥下の牢獄を問うています。生き続けているとはどういうことを問うています。「みんなで国語の教科書を読む会」の未来に向けて問うています。会を未来に引き継いでいくためには、徹底的な批判が求められています。3つ目の「しかし」から折り返すことを求められているのです。会は、時空的レベルからでなく、次元レベルから問われていくことが求められています。

## 3. 2つの「戦後」の問題化へ、「市民運動」と「文学研究」の課題の同一性

市民運動においても、平和運動においても、「戦後の精神」がわたくしたちの視界を遮ってしまっています。2つの「戦後」として事態が問われていないからです。このことは、すでに述べてきたように、読む会



に関わってのことだけではありません。伊豆さんが参加された市民運動、平和運動自体が孕んでいた問題であり、「市民運動」と「文学研究」という2つの取り組みの、ともに抱えていた問題だったのです。

時空的レベルの、いわゆる「市民運動」は貴重な取り組みです。大森荘蔵の提起によるならば、「真偽」をめぐる「生活上の分類」に関わる取り組みということになります。しかし、こうした運動は次元的レベルで問題化されていくことが同時に求められています。「世界観上の真偽の分類」が問題化されていくことが求められているのです。そのことによって、「本物一写し」という「危険な世界観」を問題にしていかなければなりません。ポスト・ポストモダンの時代を拓いていくために、パラレルワールドが問われていきます。これが3つ目の「しかし」の実践となります。市民運動にも、平和運動にも、「肉体」でなく、もちろん「観念」でもなく、「概念」としての「生命の思想」が問われています。概念としての《他者》が、です。

このことは、「文学研究」の課題ともなります。

伊豆さんの専門の近代文学研究に即して言うならば、時空的レベルに成立している〈近代の物語文学〉の問題と次元的レベルに成立している〈近代小説〉の問題の違いに関する自覚が求められているのです。大森荘蔵の提起によるならば、〈近代小説〉は「世界観上の真偽の分類」に関わる取り組みということになります。〈近代小説〉においては、世界観認識をめぐる虚偽性の問題として〈近代の物語文学〉が問われています。これが〈近代の物語文学〉の世界観認識を超えて、という課題です。パラレルワールドが問われていきます。これが3つ目の「しかし」の実践です。ポスト・ポストモダンの時代を拓いていく実践です。「肉体」でなく、もちろん「観念」でもなく、「概念」としての「生命の思想」が問われていきます。概念としての《他者》が、です。

ただし、このことは、〈近代の物語文学〉の価値を〈近代小説〉に対して一段低いものであるということにはなりません。〈近代の物語文学〉は「真偽」をめぐる「生活上の真偽」を基盤にしており、〈物語〉の永続性の中で生み出され続けていくからです。

と言うことで、「市民運動」と「文学研究」はとも

に同じ課題を抱えているということになります。しかし、伊豆さんは「ああ言えばこう言う」という足踏みの中にありました。これでは問題は拓かれていきません。こうした事態が、今日の「市民運動」と「文学研究」の課題です。それがエセポストモダン＝エセ価値相対主義という事態をいかに超えていくのかという課題です。したがって、このことは伊豆さんに限った課題ではありません。どう超えるのか。この課題の自覚は、次元的レベルの問題、未来を拓く課題として問われています。言葉の向こう側、パラレルワールドという事態からの折り返しが求められているのです。ポスト・ポストモダンの時代を拓く課題として、です。もちろん〈物語〉の永続性を前提にして、です。このことは〈物語〉の実体化と対峙していくこととなります。

今一度、思い起こしておきましょう。

「真偽」をめぐる「生活上の分類」を「本物一写し」という実体主義＝「危険な世界観」に陥らしてしまうことなく、「世界観上の真偽の盆類」を問うていくことが求められています。「真実に対しての誤り」ではなく、「真実の中での「誤り」」の問題として、です。三谷さんの「小説」についての考え方も問題として思い起こしておきましょう。

## VII. 行方不明の「ヴェトナムの光」、誠実な攻撃性を超えて

伊豆さんには、「ヴェトナムの戦争が私たち日本人の心をとらえて離さない。それは私たちの心を揺さぶり、私たちの生活のあり方、日本の現実に対する深刻な反省をよびおこすものとして発展しつつある」というように始められる「ヴェトナムの光」<sup>(35)</sup>という文章があります。

伊豆さんは、福田恒存をとりあげて、次のように述べていきます。まず、氏のヴェトナムの戦争についての論じ方に対して、(A)「その悲惨さにたまらない気がした」、「ある種の恥ずかしさをさえ感じさせられた」、「気の毒で見えていられない」と言って、その上で、

(B) 福田の主張に「一面の真実を見ないわけにはいかなかった」、それは「ヴェトナムが失われれば、ア

アジアの国々は次々に失われるだろう。そして日本はアメリカのアジアにおけるこのこされた基地となり、自由陣営と共産陣営の対立の第一線となるだろう。だから日本はベトナムの戦争で、もっと積極的にアメリカに協力しなければならない」と言っています。そして、(C)「私は福田恒存とは正反対の結論を出すけれども、彼が今日の事態の重大さ、深刻さをはっきりと指摘していて、そこから彼なりの意見を出していることを認めなければならなかった」と言います。さらに、その上で、(D)「日本がアメリカの側に立つか、共産陣営に立つかが問題なのです。すべてはそこから出発すべきなのだと、恫喝的に二者択一を迫っている」、「福田はベトナムの戦争をひたすらイデオロギーのたたかいとして見る。その硬直した観念的な戦争把握は、そこに生きる民衆の現実を見ようとしない。このような現実を生きる民衆が生み出す新しい現実、新しい思想を見ようとしない」と言うのです。

この文章には(A)と(B)の間に「しかし」が隠れています。この「しかし」の使い方は猪野の使い方です。(B)と(C)の間にも「しかし」が隠れています。この「しかし」の使い方も猪野の使い方です。(C)と(D)の間にも「しかし」が隠れています。この「しかし」の使い方は丸山の使い方です。このように見れば、ここにも「ああ言えばこう言う」が現れているということになりますが、(A)から(D)への文章の展開は(A)に囲い込まれていきます。抑え込まれていきます。福田に対する「悲惨さ」、「恥ずかしさ」、「気の毒」という断定に、です。この事態は丸山に通じていく事態です。ここにも伊豆さんにおける丸山と猪野をめぐる問題が現れています。福田などのベトナム論評が頭ごなしに撃破されています。自ら正義を疑わない文章です。

50年以上も前のこと、この文章が「上」だけ発表され、「下」は発表されなかったことなど、誰も記憶していないでしょう。伊豆さんがお書きにならなかったのか。掲載をめぐって、編集委員会との間で何かあったのか。30年以上も前に、この経緯をお聞きしたことがあります。伊豆さんはお答えになりませんでした。

わたくしはこう考えています。

伊豆さんは、自らの高揚感に自らが打ちのめされていたのではないかと。「ああ言えばこう言う」が排除され、それゆえに「ああ言えばこう言う」の逆襲にあったということではなかったのか、と。伊豆さんの提起はベトナムの「民族の伝統、民衆の智慧が縦横に生かされて感動的である」ことに支えられています。これは「肉体」としての「生命の思想」によるベトナム戦争観です。「戦後の精神」によるベトナム戦争観です。したがって、福田恒存の「ベトナムの戦争をひたすらイデオロギーのたたかいとして見る」見方に対しての異論は「ああ言えばこう言う」という事態に巻き込まれていかざるをえなかったのです。なぜか。論議が、時空的レベルでなされており、次元的レベルではなされていないからです。

伊豆さんは、時空的レベルの中で引き裂かれています。それゆえに殺気立っています。バランスが崩れています。伊豆さんの福田に対する「しかし」は、「ああ言えばこう言う」の中での出来事です。この文章の攻撃性は、その事態から逸脱した出来事ではありません。

対して、わたくしの「しかし」は3つ目の「しかし」の使い方です。事態を、時空的レベルではなく次元的レベルで問おうとしています。「真偽」をめぐる「生活上の分類」ではなく、「世界観上の真偽の分類」として、です。「真実に対しての誤り」ではなく、「真実の中での「誤り」」として、です。前者は時空的レベルの「しかし」であり、後者は次元的レベルの「しかし」です。このことは前者を軽視し、後者を重んじるということではありません。わたくしたちの日常は「真偽」をめぐる「生活上の分類」の中にあるからです。「世界観上の真偽の分類」は〈近代小説〉の神髄とは何かという課題に向き合っている提起です。前者を後者によって問題化することがポスト・ポストモダンの時代の課題です。伊豆さんの足踏みはこうした時代を拓いていく課題に対する足踏みだったのです。

とすると、こうなります。

「下」が発表されなかったことは、二つの「戦後」問題(36)に連動している、と。1945年8月15日を起点にする「肉体」としての「戦後」問題とポストモダンを起点にする、もう一つの、「概念」としての「戦後」問題、時空的レベルの「戦後」と次元的レベルの

「戦後」問題というように、です。伊豆さんの 1945 年 8 月 15 日の質感に対する倫理的な態度とそのことによって見えなくさせられてしまっていることが問われていたのではないのでしょうか。「下」が発表されなかったことは、このことに対する沈黙だったのではないのでしょうか。このことは、1965 年の伊豆利彦には圏外のもの言いですが、わたくしの、氏の識関下の掘り起こしによって現れ出てきた事態なのです。

ことの経緯は不明なのですが、「下」が未完となっていることは伊豆さんの明日の可能性です。その沈黙に何が孕まれていたのかが、わたくしたちに問われていきます。したがって、わたくしが書き継ぐ「ヴェトナムの光」(下)では、「上」の誠実な攻撃性について問題にしていくことになります。このことは、今日〈神〉と〈神〉の抗争の時代、「ポスト真実」の時代の考察になっています。「ああ言えばこう言う」によってではなく、このことをいかにしていくのかは、今日の課題です。これが〈第三項〉論からの視界です。

漱石の『こゝろ』について語った「100 年の後に生きる」(37) は、伊豆さんの遺稿とのことですが、わたくしの中でも伊豆利彦は生き続けています。「明治の精神」の問題は「戦後の精神」の問題になっていますが、「自由と独立と己」の時代の淋しい「先生」が「私」や「奥さん」の中で生き続けていくように、〈神〉と〈神〉の抗争の時代の「ああ言えばこう言う」の伊豆さんはわたくしの中で生き続けていきます。問題は「鑄型に入れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。平生はみんな善人なのです」(夏目漱石『こゝろ』)に収斂していきます。伊豆さんも「善人」でした。もう 1 人の「淋しみ」の人でした。この人は伊豆さんの識関下の人です。次元レベルに現れ出てきた人です。

「新しいアルケオロジー」の実践を〈第三項〉論の実践としてなしてきました。《伊豆利彦そのもの》は到達不可能な、了解不能の《他者》＝〈第三項〉です。しかし、《伊豆利彦そのもの》の〈影〉と対話し、〈わたしのなかの伊豆利彦〉を刻み続けてきました。「自らの〈影〉と対話し、それを刻んでいくこととともに、

です。

注

- (1) 〈第三項〉論は、田中さんによって、1999 年、「〈本文〉とは何か ◎プレ〈本文〉の誕生」(田中実・須貝千里編『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ ◎文学研究と国語教育研究の交差』第一巻(右文書院))においてその第一歩が印され、さらに 2001 年、「〈原文〉という第三項 —— プレ〈本文〉を求めて」(田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 理論編』(教育出版))において、問題の輪郭が明確に提示され、今日に及んでいます。  
〈第三項〉論の立場に立つての、〈近代小説〉の〈読み方・読まれ方〉、〈対象人物から視点人物を逆照射すること〉、〈語り手を超えるもの〉などの問題の具体については、以下の田中実さんの論文を参照のこと。同氏監修『読むこと』の術語集 文学研究・文学教育(双文社 2014 年 9 月)。他に、「小説」論ノート —— 小説の『特権』性(鷲只雄・田中実ほか編『文学研究のたのしみ』(鼎書房、2004 年 4 月))、「奇跡の名作、魯迅『故郷』の力 —— 大森哲学との出会い、多層的意識構造の中の〈語り手〉——」(『日本文学』2013 年 2 月号)、『舞姫』の恐るべき先駆性 —— 近代文学研究状況批判/語り手の語らない自己表出 —— (清田文武編『森鷗外『舞姫』を読む』(勉誠出版 2013 年 4 月))、「〈主体〉の構築」(『日本文学』2013 年 8 月号)、『雁』再論 —— 『物語』を包む〈近代小説〉の神髄——(『都留文科大学研究紀要』第 79 集 2014 年 3 月)、『神々の闘い』の時代に、鷗外の『寒山拾得』を読む(『日本文学』2015 年 8 月号)、「〈自己倒壊〉と〈主体〉の再構築 —— 『美神』・『第一夜』・『高瀬舟』の多次元世界と『羅生門』のこと ——」(『日本文学』2016 年 8 月号)、「〈第三項〉と〈語り〉/〈近代小説〉を〈読む〉とは何か —— 『舞姫』から『うたかたの記』へ ——」(『日本文学』2017 年 8 月号) などがあります。
- (2) マルクス・ガブリエル『なぜ世界は存在しないのか』(日本語訳 2017 年 12 月 講談社)を参照のこと。この本は難波博孝さんに教えられました。ガブリエルの「新しい実在」論と田中実さんの〈第三項〉論がともにポスト・ポストモダンの時代を拓く提起であることについて、本年 4 月 29 日の西安交通大学の研究会での難波さんの報告から学びました。
- (3) 『文学』(1952 年 3 月号 岩波書店)

- (4) 伊豆利彦「夏目漱石における思想と文体」(『日本文学』1961年7月号 日本文学協会)
- (5) 益田勝実「歴史社会学的方法」(『国文学 解釈と鑑賞』1966年7月号)、益田勝実「歴史社会学的方法から歴史社会的立場へ」(『日本文学』1967年10月号)を参照のこと。後者は日本文学協会の1967年度の大会(文学研究の部)での報告です。
- (6) 『前衛』(1974年2月号 日本共産党)を参照のこと。
- (7) 『日本文学』(1988年1月号 日本文学協会)
- (8) 田中実「概念としての〈他者〉」(『日本文学』1990年1月号 日本文学協会)を参照のこと。この論考に向けて、田中さんは「教材の力」(『日本文学』1977年7月号 日本文学協会)、「〈他者〉へ」(『日本文学』1988年7月号 日本文学協会)を書かれています。これらは、〈第三項〉論の提起に至る、「自己化」の問題とどう向き合うのかの思索の過程です。この思索は「天皇制」の問題とともに検討が進められていきました。
- (9) 『日本文学』(1982年12月号 日本文学協会)
- (10) 「文学史における〈境界〉——近代文学研究における雑感——」(『日本文学』(1976年11月号 日本文学協会))を参照のこと。なお、拙稿『日本文学』とは何か(『日本文学』(2009年12月号 日本文学協会))も参照していただけたら、と願います。拙稿で取り上げている1978年の座談会は、山田発言を、当時の運営委員長の杉野要吉さんを中心にした協会執行部が受け止めてのものである、と推測することができます。当時わたくしも運営委員でしたが、そうしたことは思いもよりませんでした。反省の思いを込めて書き記しておきます。
- (11) 東京大学出版会 1956年2月
- (12) 伊豆利彦「丸山静さんを思う」(『日本文学』1987年12月号 日本文学協会)を参照のこと。伊豆さんは、丸山さんが批判的に問題にしていた猪野謙二の「透谷から藤村へ——文学史的素描」(季刊『日本文学』第1集 日本評論社 1949年7月)という提起の側に立ちました。
- (13) 丸山静「『民族』と『リアリズム』——自己批判的に——」(『日本文学』1955年7月号 日本文学協会)を参照のこと。
- (14) 伊豆利彦「私と日本文学の50年」の第10回と第27回を参照のこと。ともに『葦の葉』(日本文学協会近代部会)に掲載されています。
- (15) 『日本文学』(1964年3月号 日本文学協会)
- (16) 注(13)に同じ。
- (17) 注(13)に同じ。
- (18) 注(12)に同じ。
- (19) 大森荘蔵「真実の百面相」(『朝日ジャーナル』1976年12月3日号 朝日新聞社)、のちに、同氏『流れとよどみ——哲学断章——』(産業図書 1981年5月)を参照のこと。
- (20) 注(12)に同じ。
- (21) 注(8)の「概念としての〈他者〉」と同じ。
- (22) 『日本文学』(1991年3月号 日本文学協会)
- (23) 『日本文学』(1988年9月号 日本文学協会)。パネラーは三谷邦明、佐藤美雪、塩崎文雄、発言者は兵藤裕己、高田千波、米田敏明、田中実、阿部好臣、司会は杉山康彦。1988年6月11日に、日本文学協会事務所で開催されました。
- (24) 田中実「〈第三項〉と〈語り〉／〈近代小説〉を〈読む〉とは何か——『舞姫』から『うたかたの記』へ——」(『日本文学』2017年8月号 日本文学協会)を参照のこと。氏は、「〈近代小説〉を読むために、既存の世界観認識による〈読み方〉を斥けた上で、具体的に二つの段階を提示します」とし、「まず第一、読む対象は〈原文〉ではなく、〈本文〉ですが、この段階ではまだ、〈言語以後〉の実体論の文章を読んでいることと変わりはありません」、「これを踏まえて、次の第二段階に入ると、眼に見え、耳に聞こえて知覚され、語られた出来事は〈聴き手〉によって、あるいは〈他者〉によって相対化され、虚偽として現れます」と述べています。その上で、「わたくしが近代的リアリズムを『真実』とする説に反して、『語ること〉の虚偽』を指摘しようとしたのはこのこと、「これ」を捉えんとして〈近代小説〉の『客観描写』の挑戦もあると考えます。通常の現実世界では見聞する、知覚するものは、実は、その主体の一回性に応じて現れた出来事なのですから、そう現れた一回性の、刻々と変容する瞬間の現象であることをメタレベルでとらえると複数の世界(パラレルワールド)と向き合うことが求められます」と述べています。
- (25) 拙稿『すきとほつたほんたうのたべもの』は『幸福』の『糧』——『注文の多い料理店』(宮澤賢治)における『国語』の軋み、『日本語』との抗い(『山梨大学 国語・国文と国語教育』第21号 山梨大学国語国文学会 2016年3月)を参照のこと。
- (26) 拙稿「益田勝実の〈転向〉と地団駄を受け止め直し、〈第三項〉と向き合って——戦後・国語科・教育の転換、

- 焦点としての『こころ』(夏目漱石)の学習課題の転換——」があります。この文献については本文中ですでに触れていますが、注として再掲しておきます。近日公表。
- (27) 伊豆利彦「子どもたちの現実と教育」『日本文学』1973年4月号 日本文学協会)
- (28) 『文学と教育の広場』(第32号 みんなで国語の教科書を読む会 1992年11月)
- (29) 伊豆利彦・郷静子編『国語がつまらない 文学と教育の広場を』(合同出版 1978年8月)
- (30) 「よびかけ」の文言。これは1970年9月の日付で作成され、『文学と教育の広場』M0.1(みんなで国語の教科書を読む会 1971年2月21日)で公表されました。引用は同誌によります。
- (31) 田中実・須貝千里編『「これからの文学教育」のゆくえ』(右文書院 2005年7月)に収録、参照のこと。合わせて、拙稿「鈴木三重吉の呪い」を超えて——童話『蜘蛛の糸』の誕生(田中実・須貝千里編『文学が教育にできること——『読むこと』の秘鑑』(教育出版 2012年3月)も参照のこと。
- (32) 太宰治「走れメロス」の読みと〈近代の小説〉と〈近代の物語文学〉との違いの問題については、田中実「<sup>プロット</sup>お話を支える力——太宰治『走れメロス』」(田中実『小説の力——新しい作品論のために』(大修館書店 1996年2月))、拙稿『悪い夢』問題——『走れメロス』受容史の焦点×国語科教育の課題(安藤宏編『展望 太宰治』(ぎょうせい 2009年6月))を参照のこと。
- (33) 拙稿「遠くの遠くの空の向ふ」へ——丹藤博文の『よだかの星』実践を検討する(『日本文学協会』30号 日本文学協会 1999年12月)を参照のこと。
- (34) 注(31)にあげた拙稿において、『赤い鳥』の主宰者、鈴木三重吉の「子どもの純正」という提起の問題点について検討していますので、参照のこと。鈴木においては「子どもの純正」と「語り手」の排除はセットになった問題です。
- (35) 『日本文学』(1965年7月号 日本文学協会)
- (36) 拙稿「最後の内地軍、大河原忠蔵の『戦後』——『状況認識の文学教育』論の根拠を問い直し、『80年代問題』と向き合う——」(『国語教育思想研究』第14号 2017年5月)を参照のこと。
- (37) 『20周年記念誌』(伊豆先生と漱石を読む会 2014年10月1日)を参照のこと。

付記 本稿では「戦後の精神」は夏目漱石の『こころ』の「先生の遺書」の中の言葉である「明治の精神」に對置して用いています。『こころ』における「明治の精神」とは、妻を道ずれにした「乃木希典の殉死」と妻に何も言わずに決行された「先生の自死」の違いとして問題になっていきます。「先生」の遺書には「自由と独立と己に充ちた現代に生まれた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」とあります。焦点は「自由と独立と己に満ちた現代」と「その犠牲として」の「淋しみ」をめぐる謎です。このことが「私」の手記、読者としての「妻」の問題になっていきます(近刊『第三項理論が拓く文学研究／文学教育』(明治図書)における田中実さんの『こころ』論を参照されたい)。

「戦後の精神」については、藤田省三は「戦後の議論の前提——経験について」(『思想の科学』1981年4月号 思想の科学研究会)で、「経験」をキ・ワードにして「国家(機構)の没落が不思議にも明るさを含んでいるという事の発見」、「すべてのものが両義性のふくらみを持っていることの自覚」、「もう一つの戦前」、「隠された戦前」、「もう一つの世界史的文脈の発見」の3点を指摘しています。1点目と2点目は伊豆さんの「戦後の精神」に通じています。3点目は獄に繋がれていた社会主義者、共産主義者の発見ということで、伊豆さんにとっては、このことは「観念」のレベルに属し、「肉体」のレベルに属することではなかった、と思われます。氏は「戦前」も「戦後」も「肉体」としての「生命の思想」に注目していました。藤田は1927年9月17日生まれで、伊豆さんの1つ年下で、1945年2月に志願して陸軍予科士官学校に入隊し、戦後、東京大学法学部卒業、丸山真男門下です。この件については、さらに、丸山真男『戦中と戦後の間 1936—1957』、藤田省三『天皇制国家の支原理』、『戦後精神の経験』I・II、鶴見俊輔『戦争が残したもの』(上野千鶴子・小熊英二による聞き書き)、近著としては、平川祐弘『戦後の精神 渡邊一夫、竹山道雄、E・H・ノーマン』などとの比較対照という課題が残されています。これらの「戦後の精神」像の中に伊豆利彦を置いて、その特質を浮かび上がらせたいのです。このことは「天皇制」、とりわけ「現代天皇制」の問題を問うことにも向かっていきます。その中でも、本編で触れた田中実さんの「自己化」の問題、概念としての《他者》の問題が焦点になっていきます。別稿にての課題とします。

なお、本稿は『日本文学』(2018年6月号)掲載の伊豆利彦さんに対する追悼文「伊豆利彦の『戦後』、『事実』と『真実』、『観念』と『肉体』の問い直し」の元原稿です。すでに発表のものは4000字程度のものです。